

正宗蓮日

教學小辭典

編輯部教學學會創

創 會 學 會

△要語解説五十音索引△

あ

阿育大王……………三六五
 熱原法難……………三六一
 阿仏房……………三九〇
 阿羅漢……………三六六
 安樂行品……………三七七

い

池上兄弟……………三八四
 池上と中山……………三九六
 以信代慧……………三三一
 イスラム教……………四三八
 異体同心……………三三五
 一大事因縁……………三九一
 一念三千……………一七九
 一品二半……………一五七

因果俱時……………一九五

う

有徳王と覚徳比丘……………三二四

え

依義判文……………二二〇
 演繹法と帰納法……………四三三

お

小樽問答……………四二七
 御義口伝……………二八〇

か

開三願一……………六八
 開示悟入……………六九
 戒定慧……………三七

戒壇建立……………二三八

開目抄……………二二四

科学と宗教……………四四五

価値論……………四四九

勸持品……………六七、二〇四

観心本尊抄……………二二五

観世音菩薩普門品……………二七五

観普賢菩薩行法経……………二八〇

き

機……………一三六

記小久成……………九四

義真和尚……………三七五

九十五派のバラモン……………四三〇

旧本門宗……………四〇五

教……………一三五

教相・観心……………二六二

境智冥合……………二五九

經典の結集……………三四二

京都の一致派……………三九七

教法流布の先後	一四〇
行滿座主	三七三
キリスト教	四二六

く

空仮中の三諦	二〇
久遠名字即	二五七
国	一三八
供養	三九

け

化儀の四教	九
華嚴宗の教義	一六
下種本因妙	二五
化城喻品	三三
化法の四教	五
外用と内証	二〇八
現証	一四九
還著於本人	三〇一
見宝塔品	三〇五

頤本法華宗	四〇一
頤益・冥益	三〇九

こ

劫	四九
広開近頤遠	九六
孝道教団	四三
五逆罪	四三
五五百歳広宣流布	一七五
五時	二
五重玄	一九
五重三段	一五
五十展転	三〇七
五十二位	一九
五重の相對	一四〇
五種の妙行	一四
五濁	四六
国家諫曉	三五〇
五百弟子受記品	三六
今此三界	二二

權実相對	一四三
------	-----

さ

三因仏性	二〇〇
三界	三
三箇の勅宣	一〇二
三災七難	四四
三時の弘教	一六八
三十二相	三五
三周の聲聞	九〇
三重秘伝	一九九
三種の教相	三二
三種の法華經	六六
三証	一四七
三障四魔	二九七
三身	一九二
三世間	二〇
三千塵点劫と五百塵点劫	三
三大秘法	三三
三變土田	三

三 宝	一六
三方便	二五
三類の強敵	二五
三 惑	一九

し

自我偈	一〇九
色心不二	二五〇
直達正觀	二八三
自行化他	三三八
四句の要法	二九
四箇の格言	一〇
四悉檀	二〇四
四 衆	二四
四重興廢	一五〇
自受用身の勝劣	二七四
四条金吾頼基	三六二
四 諦	二九
七 譬	八七
十界互具	一八二

実存哲学	四九
示同凡夫	二七三
事と理	一八一
舍衛の三億	一七六
釈迦仏像を本尊としない理由	二四四
釈尊の一生	三三六
釈尊の九横の大難	三三
迹門と本門	八四
從因至果・從果向因	二六
宗教の五綱	一三四
十四誹謗	二九
從地涌出品	六
十大部	二六
十二因縁	二九
十如是	一八四
十羅刹女	五二
授学無学人記品	六四
授記品	三
儒 教	四三
宿縁深厚	二五

主師親の三徳	二五
受持即觀心	二六三
種熟脱	一九七
種脱相對	一四三
地涌の菩薩	一六三
寿量品の三妙合論	一六
順縁・逆縁	二四四
章安大師	三七一
生死一大事血脈	二六九
授受・折伏	二九二
淨蔵・淨眼	一二三
淨土宗の教義	二
常不輕菩薩品	三二
正法一千年間の弘教	一六九
声聞の十大弟子	三三
常樂我淨	二六七
初住位の本因と久遠元初の本因	二七六
諸天の加護	三六
序品	七

信解品	六二
真言宗の教義	三三

す

随縁真如の智	二七七
随喜功德品	七
垂迹と再誕	二六八
随方毘尼	三三三
砂村問答	四四四

せ

性善説と性悪説	四四五
世法と仏法	三三四
前三・後三	二二
禪宗の教義	三
染浄の二法	二七二
善知識・悪知識	三三三

そ

相待妙・絶待妙	二〇六
---------	-----

総別の二義	二六六
-------	-----

像法一千年間の弘教	一六九
-----------	-----

草木成仏	二六六
------	-----

即身成仏	二五三
------	-----

嘱累品	七三
-----	----

た

大綱と綱目	二二九
-------	-----

大御本尊への疑難を破す	三三
-------------	----

大小相對	一四二
------	-----

大通智勝仏	二〇二
-------	-----

体内・体外	二〇七
-------	-----

提婆達多	三六四
------	-----

提婆達多品	六六
-------	----

多宝の塔	一〇六
------	-----

陀羅尼品	七六
------	----

ち

中国への仏教伝来	三四四
----------	-----

て

伝教大師	三三四
------	-----

霽志問答	四六六
------	-----

転重軽受	三〇六
------	-----

天台宗の教義	一七
--------	----

天台大師	三七〇
------	-----

と

動執生疑	一五九
------	-----

道邈和尚	三三三
------	-----

当体蓮華	二四七
------	-----

時	一三七
---	-----

富木常忍	三六七
------	-----

な

内外相對	一四二
------	-----

南岳大師	三七二
------	-----

南条時光	三八五
------	-----

に

二箇相承	三七七
------	-----

日有上人……………	三七七
日寛上人……………	三七七
日目上人……………	三七五
日蓮宗一致派……………	三九一
日蓮宗不受不施派、同	
講門派……………	三九七
日蓮大聖人のご一生……………	三四八
日興上人……………	三三三
日本への仏教伝来……………	三四六
如是我聞……………	三八三
如説修行……………	三七七
女人成仏……………	三三三
如来寿量品……………	三九六
如来神力品……………	三七三
如来秘密神通之力……………	二七三
人法一箇……………	二四六

は

八教……………	五
八相作仏……………	三四

原殿御書……………	三六〇
-----------	-----

ひ

譬喩品……………	六〇
病氣の原因……………	三〇三
ヒンズー教……………	四三二

ふ

不軽品の意義……………	一二三
福 運……………	三〇八
福十号に過ぐ……………	二八三
普賢菩薩勸発品……………	七六
不自惜身命……………	三二一
付法蔵の二十四人……………	三七七
プラグマティズム……………	四四一
分別功德品……………	七〇

へ

変毒為藥……………	三〇五
-----------	-----

ほ

方便品……………	七〇
方便品・寿量品を	
読誦する意味……………	三三三
謗法厳戒……………	三〇〇
法華経の新訳・旧訳……………	三四五
法華経八卷二十八品……………	三六
法華宗……………	四〇三
法師功德品……………	七二
法師品……………	六四
發迹顯本……………	九七
本因の境智行位……………	二七五
本化付嘱と迹化付嘱……………	二五
本迹相對……………	一四三
煩惱即菩提……………	二六六
本仏論の遮難……………	二七六
本門戒壇の大御本尊……………	三三五
本門八品の意味……………	一〇三
本門法華宗および仏立宗等……………	三九七

要語解説

目次

第一編 仏教一般

四諦……………二九

十二因縁……………二九

六波羅蜜……………三一

三界……………三一

八相作仏……………三三

三十二相……………三三

阿羅漢……………三六

戒定慧……………三七

五逆罪……………四〇

三災七難……………四〇

五濁……………四六

劣応身・勝応身……………四八

劫……………四九

十羅刹女……………五一

声聞の十大弟子……………五一

釈尊の九横の大難……………五三

五時……………二

八教……………五

四箇の格言……………一〇

浄土宗の教義……………二

禪宗の教義……………三

真言宗の教義……………三

律宗の教義……………五

華嚴宗の教義……………六

天台宗の教義……………七

三惑……………九

空仮中の三諦……………二〇

第二編 法華經に関するもの

法華經八卷二十八品	一五
如是我聞	一六
迹門と本門	一四
三種の法華經	一六
七譬	一七
開三顯一	一八
開示悟入	一九
三周の聲聞	二〇
一大事因縁	二一
三變土田	二二
三千塵点劫と五百塵点劫	二三
記小久成	二四
略開近顯遠	二五
広開近顯遠	二六

発迹顯本	二七
六難九易	二八
竜女・提婆	二九
大通智勝仏	三〇
三箇の勅宣	三一
本門八品の意味	三二
勸持品	三四
多宝の塔	三六
靈鷲山	三八
自我偈	三九
三世間	四〇
今此三界	四一
不輕品の意義	四二
淨藏・淨眼	四三
四衆	四四
本化付嘱と迹化付嘱	四五

摩訶止觀……………一七

六即……………一六

五十二位……………一九

三種の教相……………二三

五種の妙行……………二四

從因至果・從果向因……………二六

四句の要法……………二九

第三編 日蓮大聖人の教義

宗教の五綱……………一四

五重の相對……………一四〇

三証……………一四七

三重秘伝……………一四九

四重興廢……………一五〇

五重三段……………一五一

文底秘沈……………一五三

文底下種三段……………一五四

流通分……………一五五

一品二半……………一五七

地涌の菩薩……………一五八

寿量品の三妙合論……………一六六

三時の弘教……………一六六

五五百歳広宣流布……………一七五

舍衛の三億……………一七六

一念三千……………一七九

事と理……………一八一

十界互具……………一八二

十如是……………一八四

三身……………一九二

因果俱時……………一九五

三宝……………一九六

種熟脱……………一九七

五重玄	一九
三因仏性	二〇〇
四悉檀	二〇四
三方便	二〇五
相待妙・絶待妙	二〇六
体内・体外	二〇七
外用と内証	二〇八
依義判文	二一〇
前三・後三	二一一
立正安国論	二二三
開目抄	二二四
觀心本尊抄	二二五
十大部	二二六
大綱と綱目	二二九

三大秘法	二三
本門戒壇の大御本尊	二三
戒壇建立	二三八
末法の御本仏	二四一
人法一箇	二四六
当体蓮華	二四七
色心不二	二五〇
下種本因妙	二五一
即身成仏	二五三
主師親の三徳	二五四
久遠名字即	二五七
境智冥合	二五九
末法の觀心	二六〇
教相・觀心	二六三
受持即觀心	二六三
煩惱即菩提	二六六

第四編 三大秘法

常樂我淨……………	二七
總別の二義……………	二六
生死一大事血脈……………	二九
染淨の二法……………	二七
示同凡夫……………	二七
如来秘密神通之力……………	二七
自受用身の勝劣……………	二七
本因の境智行位……………	二五
初住位の本因と久遠元初の本因……………	二六
随縁真如の智……………	二七
本仏論の遮難……………	二六
御義口伝……………	二〇
我が身即妙法蓮華經……………	二二
直達正觀……………	二三
福十号に過ぐ……………	二三
宿縁深厚……………	二五

草木成仏……………	二六
垂迹と再誕……………	二八

第五編 信心修行

授受・折伏……………	二二
順縁・逆縁……………	二四
三類の強敵……………	二五
三障四魔……………	二七
十四誹謗……………	二九
謗法嚴戒……………	三〇
還著於本人……………	三〇
病氣の原因……………	三三
変毒為藥……………	三五
転重軽受……………	三六
五十展転……………	三七
福運……………	三八

頭益・冥益……………三〇九

不自惜身命……………三二一

有徳王と覚徳比丘……………三二四

異体同心……………三二五

如説修行……………三七

自行化他……………三八

聞法下種と発心下種……………三九

以信代慧……………三一

随方毘尼……………三三

善知識・悪知識……………三三

世法と仏法……………三四

勇猛精進……………三五

諸天の加護……………三六

魔の通力……………三七

供養……………三九

臨終の相……………三一

女人成仏……………三三

方便品・寿量品を讀誦する意味……………三三

第六編 仏教史

釈尊の一生……………三六

付法蔵の二十四人……………三七

經典の結集……………三四

中国への仏教伝来……………三四

法華經の新訳・旧訳……………三五

日本への仏教伝来……………三六

日蓮大聖人のご一生……………三八

国家諫曉……………三〇

日興上人……………三五

六老僧……………三五

二箇相承……………三七

身延離山……………三八

原殿御書……………三六〇

熱原法難……………三六一

提婆達多……………三六四

阿育大王……………三六五

竜樹・天親……………三六七

天台大師……………三七〇

妙樂大師……………三七二

伝教大師……………三七四

日目上人……………三七五

日有上人……………三七七

日寛上人……………三七七

六卷抄……………三七八

四条金吾頼基……………三八二

池上兄弟……………三八四

南条時光……………三八五

富木常忍……………三八七

阿仏房……………三九〇

日蓮宗一致派……………三九一

本門法華宗（旧八品派）および仏立宗等……………三九七

顕本法華宗……………四〇一

法華宗……………四〇三

旧本門宗……………四〇五

立正佼成会……………四〇七

孝道教団……………四一二

砂村問答……………四一四

霑志問答……………四一六

小樽問答……………四一七

第七編 古今の思想哲学の

説明と批判

九十五派のバラモン……………四二〇

儒教……………四二三

ユダヤ教	四二四
キリスト教	四二六
イスラム教	四二八
ヒンズー教	四三一
演繹法と帰納法	四三三
性善説と性悪説	四三五
唯物論と唯心論	四三七
実存哲学	四三九
プラグマティズム（実用主義）	四四一
唯物弁証法	四四三
科学と宗教	四四五
価値論	四四九

第三編

日蓮大聖人の教義

【宗教の五綱】しゅうきょうごこう

日蓮大聖人の仏法は、世界最高唯一の宗教であり、しかも、ただ日蓮正宗にのみ正しく承継しょうけいされている。日蓮正宗以外の他の日蓮宗各派は、いずれも日蓮大聖人の教えを歪曲わいきよくし、誹謗ひぼうする邪宗教である。およそすべての物に測る基準があるように、宗教の正邪・勝劣・高低・浅深せんじんも、厳正細密な基準による判別すなわち宗教批判の原理によって判定され、誤りのない宗教が選り出されなくてはならない。現代において比較宗教学等があるが、古来、仏教各派では、教判きょうはんによって法門を立てる根拠こんきよとし、他宗との勝劣異同を明らかにしてきたのである。中国においては、天台大師が五時八教判、三種の教相判等の優秀な教判をもって天台宗を宣揚せんようした。

日本に出現の日蓮大聖人は、全世界の哲学・宗教界を通じて、まったく卓絶たくせつした古今無類ここんむるいの総合的な教判を打ち立てた。これが宗教の五綱ごこうである。現代の思想、哲学においても、このようなすぐれた科学的な思想批判の原理は存在しないのである。日蓮大聖人は、この厳密げんみつな宗教批判の原理によって、すべての宗教の優劣を判定して、哲学的に思想的に科学的に最高のすぐれた大仏法を樹立したのである。

すなわち日蓮大聖人は開目抄下あきめしょうげ（二三二頁）に「智者に我義やぶられずば用いじとなり」また妙一女御返事（一二五九頁）に「其の理にまけてありとも其の心ひるがへらずば・天寿をも・めしとれかし」すなわち「もし万が一にも私より偉大なる聖哲せいてつが現われて、私の教義が打ち破られない限り、父母を殺されるような迫害があっても、日本の国王としようというような誘惑ゆうわくがあっても、いささかもひるまず正法を弘めひろ、全民衆の柱、

眼目、大船とならんという誓いを絶対に破るまい」また「もし私の教義が少しでも間違っているとわかつても改めないならば、私の命をとってください」という有名な宣言をなされ、あくまでも厳格な科学的な態度と絶對の確信に立っていたのである。

さらに、日蓮大聖人は「日蓮仏法をこころみるに道理と証文とはすぎず、又道理証文よりも現証にはすぎず」（三三藏祈雨事一四六八頁）と述べ、高い教義の文獻的な証拠である文証、教えが道理にあつて科学的、哲學的な批判にたえうる理証、また信ずる者がすべて救われるという現証の三証具足をもって万全を期している。

日蓮大聖人の宗教の五綱とは宗教の五義ともいい、教、機、時、国、教法流布の先後の五つであり、弘長二年（西紀一二六二年）二月、伊東の流罪において著わし、教機時国抄（四三八頁）に説かれてある。教、機、時、国、教法流布の先後判のなかで、教判は禅宗を除く各宗派でそれぞれ立てているが、天台宗の教判が特にすぐれていた。また機判については、浄土宗が力を入れていたが、まったく見当違いな機判である。さらに時判、国判は伝教大師が述べているが、いまだ完全でなかった。教法流布の先後に關してはいまだ誰人も説いていなかった。しかるに、末法の御本仏日蓮大聖人が、ここに実践のうえに立つて、宗教の五綱という偉大かつ完全なる宗教批判の原理を打ち出したのである。

教を知るとは

「教を知る」とは、仏・菩薩の説いた經・律・論および、あらゆる聖賢の思想・哲學・宗教のなかで、いずれが最高であるかを見きわめていくことである。これには、五重相對、五重三段、四重興廢、四重淺深、三重秘傳等の教判がある。詳しくは別項で論ずることとする。

教機時国抄（四四〇頁）所以に法華經は一切經の中の第一の經王なりと知るは是れ教を知る者なり。

機を知るとは

「機を知る」とは、衆生が教を受けられる状態にあるかどうかを見定めることである。釈尊の十大弟子の一人で智慧第一といわれた舍利弗も、衆生の機根を知らずに説法して失敗したといわれている。ここで、民衆がいかなる教えによって成仏するか、永遠の絶対的幸福をうるか、その民衆の機根を知らなければならぬ。

釈尊の仏法では、衆生の機根に利鈍・純雑がある等と説いており、それぞれの機根に応じて、別々の教えを説いた。それは、釈尊の仏法の衆生は、何度もこの世に生まれてきては、一人仏道修行を励んできた本已有善、すなわち本より已に善のある衆生である。釈尊の在世に救われなかった者も、釈尊滅後千年の正法時代、釈尊滅後千年から二千年までの像法時代にみな出現して得道した。

しかるに釈尊滅後二千年以後の末法の衆生は、本末有善、すなわち本よりいまだ善あらざる衆生で、ぜんぜん釈尊の仏道修行を積んでいないけれども、日蓮大聖人の仏法を信じて即身成仏する機根の衆生である。日蓮大聖人は、教機時国抄（四三八頁）に「謗法の者に向つては一向に法華經を説くべし毒鼓の縁と成さんが為なり……信謗共に下種と為ればなり」と述べている。積善の功がない衆生であり、しかも即身成仏の大仏法であるゆえに、強いて説いて信・謗ともに救うのである。

末法の法華經とは、とりもなおさず三大秘法の南無妙法蓮華經のことである。すなわち三大秘法の仏法以外に幸福になれないのが、末法の機根である。

また、教育の発達した二十世紀の現代に、葬式以外になんの用もないような既成仏教や、想像する以外に立証できない天地創造神を立てるキリスト教等を、はたして、まじめに信ずることができるであろうか。科学的

な生活を営いとなんでいる現代人は、唯ゆい心思想、唯物思想ゆいぶつを止揚する日蓮大聖人の色心不二の大生命哲学を求めて集あついきたるのが当然といえよう。特に批判力たくましい青年層や学生層が、日蓮正宗創価学会に、多数入会している現実が、これを証明している。

時を知るとは

時の流れに逆行したために、悲劇的な終末をむかえざるをえなかった人々は、古今東西の歴史に数多く現われてくる。いわんや、仏法を学ぼうとする者は、まず時を知らなければならぬ。仏法の時といえは、正像末の三時が、最も大事である。すなわち釈尊は、自分の入滅後を三つの時代に大きく区分している。初めの千年を正法時代、次の千年を像法時代、釈尊滅後二千年以後を末法時代という。時は社会全体に大きく影響をもつゆえ、釈尊も説く時いまだこないときには、父母等にも聖賢にも、軽々しく最高の法華経を説くことがなかった。

釈尊の予言のように、正法時代には法華経の精神をもとに竜樹りゅうじゆ・天親てんじんが権大乘を弘ひろめ、像法時代には天台・伝教が法華経の迹門を弘めたのが、仏法の正統であった。しかしして現在は末法の時代であると知るのが時を知ったことである。

釈尊は三千年前の法華経等に、明確に、末法の時代は、釈尊の仏法は滅して、次に偉大なる本仏が出現し、全世界の民衆を救うであろうと予言している。

その教説に寸分もたがわず出現なされたのが、末法の御本仏日蓮大聖人である。ゆえに日蓮大聖人の仏法を信ずる人こそ、真に時を知る人である。

さらに、日蓮大聖人の仏法が流布されていくうえにも時があった。日蓮大聖人は建長五年、御年三十二歳で

三大秘法のなかの題目をまず唱えられ、次に弘安二年、御年五十八歳で本門戒壇の大御本尊を建立され、次に本門の戒壇を建立せよと滅後の弟子にご遺命ゆいめいになった。日蓮大聖人滅後六百八十余年、いま南無妙法蓮華經を唱える者は、全国に数千万人となった。しかし日蓮正宗信徒以外は、肝心かんじんの御本尊を知らないゆえに、狐きつねや蛇へびや先祖の戒名、あるいは釈尊像や鬼子母神等の誤れる本尊に向かつて南無妙法蓮華經を唱えている現状であった。

この時にあたって、日蓮正宗創価学会は、第二代戸田会長が昭和二十六年五月三日、会長就任と共に「いまこそ本尊流布の時なり」と叫んで、日蓮正宗の正しい大御本尊を、日本全国民いな全世界の民衆に流布し、真の幸福生活、平和社会を実現するために折伏の大前進を開始した。そして、いま、第三代池田会長の時代に、さらに本尊流布は全世界にわたって着々となされている。

国を知るとは

その国の国情を知らなければ仏法を流布することはできない。日蓮大聖人は教機時国抄（四三九頁）に「国とは仏教は必ず国に依って之を弘むべし国には寒国・熱国・貧国・富国・中国・辺国・大国・小国・一向偷盗国ちゆうとうこく・一向殺生国ころせつしょうこく・一向不孝国等之有り、又一向小乗の国・一向大乘の国・大小兼学しょうけんがくの国も之有り、而るに日本国は一向に小乗の国か一向に大乘の国か大小兼学の国なるか能く之を勘うべし」と述べている。

すなわち、その国によって、邪智じやち・謗法ぼうぼうの国、無智・悪国、仏法に縁の薄い国、小乗教に縁のある国、大乘教に縁のある国等がある。

日本は大乘に縁のある国であり、特に法華經に縁が深い国である。法華經陀羅尼だらに品では、四方を守る四天王

のなかで、東方・北方を守る持国天王、毘沙門天王の二天のみが法華經を持つものを守護すると誓っている。

これは、インドより東北方の中国および日本に法華經が流布することを暗示しているものである。また瑜伽論には「東方に小国有り其の中に大乘の種姓のみ有り」と書かれている。また漢訳妙法蓮華經の訳者として仏教学者である、羅什三蔵の師・須利耶蘇摩三蔵は、羅什に法華經を与えて、ねんごろに「仏日西山に隠れ遺耀東北を照す茲の典東北の諸国に有縁なり汝慎んで伝弘せよ」といったという。

これらは、すべてインドの東北にあたる日本国をさすことは明らかであり、日本国に大乘仏法、特に法華經の弘まるべきことを説いているのである。

像法時代、伝教大師は比叡山に法華經迹門の戒壇を立て、日本民衆はことごとく法華經に帰依して法華經迹門の広宣流布は成就した。いまは日蓮大聖人が末法の御本仏として、三大秘法の大仏法を日本に建立された。

観心本尊抄（二五四頁） 此の時地涌千界出現して本門の釈尊を脇土と為す一間浮提第一の本尊此の国に立つ可し。

三大秘法稟承事（一〇二二頁） 靈山淨土に似たらん最勝の地を尋ねて戒壇を建立す可き者か。

顕仏未来記（五〇八頁） 仏法も又以て是くの如し正像には西より東に向い末法には東より西に往く……仏法必ず東土の日本より出づべきなり。

諫曉八幡抄（五八八頁） 天竺国をば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国をば日本国と申すはに聖人出で給わざらむ、月は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相なり、日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり。

これは日本出現の大仏法が中国、インド、さらに全世界へと流布するという予言であり、いまやその予言は明らかに的中しつつある。全世界の国々の民衆はこの大動乱の最中に、大仏法を求めているという姿を知るのを、正しく国を知るといっているのである。

教法流布の先後を知るとは

「教法流布の先後を知る」とは、先に弘ひろまった教えを知って、後の教えを弘めよということである。宗教批判の原理によって明らかのように、外道よりも内道、小乗教よりも大乘教、権大乘教よりも実大乘教、法華經迹門よりも本門としだいに教えが高くなっている。

いまだ仏教の弘まったことがない国ならば小乗教を弘めてもよい場合がある。しかし法華經の迹門が広宣流布したところのある日本の国には、いまさら小乗教や権大乘教を弘めても、なんの役にも立たない。すなわち日本には、日蓮大聖人の立てた本門寿量品文底下種の三大秘法が弘められるべき順序となっている。このことを知るのが「教法流布の先後を知る」ことである。

【五重の相對】

五重の相對とは、一切の宗教を比較検討し、その浅深・高低・優劣を判釈する五つの批判原理をいう。一、内外相對、二、大小相對、三、權實相對、四、本迹相對、五、種脱相對であり、この判定によって、日蓮大聖人が立てられた三大秘法の仏法が最高であることが明らかになるのである。

内外相對

内とは内道で仏教のことをいう。外とは外道で仏教以外のバラモン教、キリスト教、イスラム教、儒教、ヒンズー教等をさす。日本の新興宗教である天理教、PL教等も外道の一つである。この比較の基準は因果の理法にある。

仏教は、因果すなわち原因結果の法則のうえに立って教えを説くので、科学的であるが、外道は因果を無視した教えを立てるので、非科学的であり、民衆を幸福にする生活指導の宗教とはなりえない。ゆえに、内外相對して、内道の仏教が勝れ、外道は劣るのである。

たとえば、キリスト教の天地創造説や処女懐胎、復活、昇天説等の唯心的、觀念的な生命論は、非科学的であるのに反し、仏教の生命觀、宇宙觀は、むしろ現代科学をリードする哲学であるといえる。

大小相對

仏教のなかにも、大乘教と小乗教がある。小乗教とは、俱舍宗、成実宗、律宗などをさし、阿含の四經をよりどころとして、小乗の戒律を立てる教えで、少ない範圍の人を、あるわずかな期間だけ救えるのである。しかし大乘教は、小乗教より教えが高邁であり、多くの民衆を長い期間にわたって救うことができる。ゆえに大乘教が勝れ、小乗教は劣るのである。

インドより中国、日本に伝来した仏教は、ほとんど大乘教であり、大乘教は現在、セイロン、ビルマ、タイ国等の東南アジアに弘まっている。しかし、最近、根本仏教、原始仏教等を唱える一部のものが阿含經等を重視しようというような動きがあるが、哲学的、思想的、歴史的に論じて、浅薄な根拠に基づく愚論である。また、日本の新興宗教のなかには、小乗教の理法をとって低級教義の補助としてしているものがあるのも、おかしいことである。

権実相對

同じ大乘教のなかにも、権大乘教と実大乘教がある。権とは真実に対して権かりという意味で、西方十萬億土に極樂淨土ごくらくじやうとがあるとか、あらゆる理想を整えた金ピカの仏ほとけがいると説くなどはこれである。権大乘の教えは、念仏宗、真言宗、禪宗などが立てる經文にあり、法華經を説くための誘引ゆういんの教えであり、方便、権かりの教えにすぎない。これに対して、実大乘教とは法華經のことであり、法華經には真実の生命觀、宇宙の実相、幸福生活確立の指導原理が説かれている。

釈尊は法華經の前に説いた無量義經において「四十余年未顯真実」すなわち「四十余年にわたって説いてきた権大乘の教えは、いまだ真実の哲學を説いていない。これから説く法華經こそ、まさしく真実の教えである」と宣言し、さらに法華經方便品第二においても「正直捨方便」すなわち「すなおに方便の教である権大乘教を捨て、唯一の正法、法華經を信ぜよ」と自ら命じていることを忘れてはならない。ゆえに、実大乘の法華經が勝れ、権大乘の華嚴、法相、淨土、禪、真言、三論宗等の依經は劣おとっているのである。

本迹相對

法華經二十八品には本門と迹門しやくもんとがある。迹門とは前半の十四品で、インドで仏になった釈尊が理論上の実相觀を述べたものである。すなわち、諸法実相十如是の法門のうえから理の一念三千を説き、声聞しょうもん（學者階級）や緣覺えんかく（一芸ひとひに秀でた人々）や菩薩ぼさつ（民衆を救っていく立ち場の人）や、それぞれ衆生が好むところに従って説いてきたいままでの権教を破り、人生の目的はただ一つ成仏する（絶對的な幸福境涯をつかむ）ことにあると示している。本門とは、後の十四品で、仏の具体的な振舞いや永遠の生命觀に立った宇宙觀等を説き、行動のうえから事の一念三千を説いている。

本門は真実の姿で、迹門はその影にあたり、また本門は實際生活のうえから説き、迹門は理論的、學問的な

説明をしているようなものである。たとえていえば、迹門とは家の設計図のようなものであり、本門は実際に建てた家のような関係にある。ゆえに、本門は勝れ、迹門は劣っているのである。

中国の天台大師は、迹門を表にし本門を裏にして理の一念三千を説き、その立ち場から本迹は異なるけれども不思議一なりと説いて天台宗を立てた。しかし、日蓮大聖人の独一本門の教えには遠くおよばない。しかるに、日蓮宗各派のなかでも、日蓮大聖人の滅後に、日興上人以外の五老僧は天台の弟子と名のり、本迹一致の邪義を立てた者がある。その流れが、いまの日蓮宗身延派や中山派などである。

日蓮大聖人は「法華經に又二經あり所謂迹門と本門となり本迹の相違は水火天地の違目なり、例せば爾前と法華經との違目よりも猶相違あり」（治病大小権実違目九九六）と明らかに示されている。これに対して、本迹一致門流は、教相勝劣・觀心一致というような邪義を立てたこともあったが、同じく「一念三千の觀法に二つあり一には理・二には事なり天台・伝教等の御時には理なり今は事なり觀念すでに勝る故に大難又色まさる、彼は迹門の一念三千・此れは本門の一念三千なり天地はるかに殊なりことなりと御臨終の御時は御心へ有るべく候」（治病大小権実違目九九八）等の明文に打ち破られて本迹一致門流からも、多くの本迹勝劣を立てる新しい宗派ができることになった。日蓮宗身延派などの本迹一致派は、このように打ち破られ続けてきたので、最近では一致であるような、ないような、あいまいな教義を立てている。

種脱相對

法華經本門の中心は如来寿量品第十六である。ここに文上脱益、文底下種という二つの法門がある。そもそも仏教には種熟脱の法門があり、これを知らないで仏教を学べば、大きな混乱が起こるのである。ある時に、ある仏に従って、衆生が初めて説法を聞くのを下種という。長い間養育されていくの

を熟といい、最後にまたその仏にあって成仏得道するのを脱と名づける。この下種益、熟益、脱益を三益という。法華經本門には、釈尊の仏法を信じた人々は、五百塵点劫じんてんこくという大昔に下種をうけ、たいへん長い間調熟じようじゆくされて、三千年前に釈尊がインドに出現して法華經本門壽量品を説いたのを信じて脱すると説いている。ゆえに如来壽量品第十六の文上の教えを脱益というのである。しかるに、過去に下種されながら釈尊の壽量品にあえなかつた者や、インドに生まれたときに下種をうけた者は、釈尊滅後の正法千年間にいろいろな仏法の教えによって成仏した。また成仏できずに残つた衆生に対して、釈尊入滅後一千年から二千年にわたる像法時代の教主・天台大師は、理の一念三千の珠を摩訶止観まかしかんにつつんだ觀念哲学をもつて、調熟しつつ得道せしめた。これを熟益の教えという。

しかして、同じ壽量品に、五百塵点劫と限られた仏でなく、宇宙と共に実在する無始無終むしむじゆうの常住の本仏、久遠元初おんがんじよの自受用報身如来じじゆゆうほうしんにやうらいのことが説かれている。釈尊はもとより、あらゆる仏がみなこの久遠元初の自受用報身如来に教えをうけて成仏することができたという根本の仏である。この仏は南無妙法蓮華經をもともと所持しており、釈尊滅後二千年すぎた末法の時代に、あらゆる釈尊の仏教が滅した時に出現して、本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目という三大秘法を打ち立てられることを示されている。これを文底下種の法門という。現代のわれわれは、この日蓮大聖人の仏法を信ずれば、釈迦仏法のような長い期間にわたる修行の必要もなく、現世において絶対の幸福を勝ち取ることができる。すなわち、この文底下種仏法は、下種益、熟益、脱益の三益をぜんぶ即時にそなえている。ゆえに下種の教えが勝れ、熟脱の教えは劣るのである。

釈迦仏法の衆生は、文上脱益の衆生であり、現在の末法の衆生は、釈尊には直接に縁のない衆生であるゆえ

に、日蓮大聖人の文底下種法門によらなければ救われない。すなわち釈尊は末法には法華經のごとき白法も隠没もつすると予言し、日蓮大聖人は「今末法に入りぬれば余經も法華經もせん證なし、但南無妙法蓮華經なるべし」(上野殿御返事一五四六頁)また「法華經は文字はありとも衆生の病の藥とはなるべからず」(高橋入道殿御返事一四五八頁)と仰せである。

日蓮宗と名のる宗派は多くあるが、本迹の勝劣まではわかって、この第五の種脱相對の法門はいかなるところもわからず、ただ日蓮正宗のみが伝える深秘の法門である。ゆえに種脱相對して立てた法華經本門壽量品の文底下種の三大秘法を立てることを、あらゆる全世界の思想、哲学、宗教等を通じて、真に「教を知るもの」といえるのである。

次に種脱相對とは、日蓮正宗で勝手に立てたのではないかと疑う者がいるが、決してそうではない。種脱相對の法門こそ、日蓮大聖人の最高の明らかな教説である。

日蓮大聖人のご相伝の書を別にすれば、開目抄と觀心本尊抄はひじょうに重要な御書である。日蓮大聖人は開目抄に五重の相對を明かし、最後に種脱相對を説かれた。また觀心本尊抄には五重の三段を明かして文底下種三段に説かれたのである。四重の相對とか四重の三段等を立てるのは、まったくの邪説である。御書のどこを拝してもそのようなことは説かれていない。すなわち開目抄上(一八九頁)にいわく「一念三千の法門は但法華經の本門・壽量品の文の底にしづめたり」と。觀心本尊抄(二四九頁)にいわく「在世の本門と末法まっぽうの始は一同に純円じゅんえんなり但ただし彼は脱だつ此れは種しゆなり彼は一品二半此れは但ただ題目の五字なり」と。

また御義口伝上(七三五頁)には「酒とは無明なり無明は謗法なり……酒に重重之れ有り權教は酒法華經は

醒めたり、本迹相對する時迹門は酒なり始覺の故なり本門は醒めたり本覺の故なり、又本迹二門は酒なり南無妙法蓮華經は醒めたり」と仰せである。すなわち「法華經の迹門と本門とは共に酒で、南無妙法蓮華經のみが醒めている」という仰せは、明らかに第五の種脱相對であり、文底下種三段にあたるものである。

ゆえに本迹相對を知らない日蓮宗身延派や中山派などは、三重の相對、三重の三段までしかないのである。また種脱相對を知らない顯本法華宗、本門法華宗、仏立宗等は、四重の相對、四重の三段までしか立てられないのである。これでは無明であり、謗法であり、日蓮大聖人の仏法ということとはできない。

さらに、せっかく第五の法門として種脱相對とか教觀相對とかいいながら、種熟脱は法門の違いではなく利益の違いだけの体同益異である等と主張するものがある。しかし、第五の種脱相對、文底下種三段の法門は、種と脱の利益はもちろん違いがあり、その法門も、説法する仏も、序、正、流通の三段の立て分けも、化導の始終も、すべて異なることを知らなければ、仏法を学んでいるとはいえない。

御義口伝下（七五三）に「惣じては迹化の菩薩此の品に手をつけいろうべきに非ざる者なり、彼は迹表本裏・此れは本面迹裏・然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云」と。

このように迹表本裏といい本面迹裏といえは、法門自体が変わってくるのが当然である。しかして、天台・伝教の教と末法の教とを厳然と區別したうえで、さらに「然りと雖も而も当品は末法の要法に非ざるか」として、在世脱益と滅後下種の相を明らかにお示しになっている。釈尊在世は寿量品で脱益、末法の時代は南無妙法蓮華經で下種益、在世の仏は釈尊、末法の仏は日蓮大聖人との法門が明々白々としている。

宗教の優劣^{ゆうれつ}、浅深^{せんじん}を定める基準の一つ。文証、理証、現証の三つをいう。文証とは証文のこと。一つの教義または主張がどんな文献によっているかを調べて測定^{そくじやう}の基準とする。理証とは道理のこと。文証が道理にかなっているかどうかを調べる。現証とは、現実の証拠^{しやうこ}のこと。その教えがはたして現実に証拠を示すことができるかどうかをみる。

文証

文書、記録などの証拠のこと。仏法の場合は、一つの教義または主張が、なにかの教典によっているか。もし文献があるとすれば、どんな経または論釈によっているかを検討^{けんとう}して判定^{はんてい}の標準^{ひやうじゆん}とする。

一応もつともらしい教えであっても、口伝えのものでは信用するにたりない。また仏説でないものは、それが「見まことしやかにみえても、外道として却^{しりぞ}けられるのである。

涅槃^{ねはん}經に「若^もし仏の所説に順^{したが}わざる者あらば当^{まさ}に知るべし是の人は是れ魔の眷属^{けんぞく}なり」とある。その一例と

して、禪宗などは經論によらないといって、教外別伝^{きやうがいべつでん}、不立文字^{ふりゆうもんじ}を立てるが、これなどは明らかに、文証の点

から邪義と判定^{はんてい}することができる。蓮盛抄^{れんじやう}（一五三）に「謂^いく教外と号し剩^{あまつ}さえ教外を学び文筆^{たしな}を嗜^{たしな}みなが

ら文字を立てず言と心と相違^{あひ}せず豈^{あに}天魔の部類・外道の弟子に非ずや、仏は文字に依^よって衆生を度し給うな

り、問う其の証拠如何、答えて云く涅槃^{ねはん}經の十五に云く「願^{ねが}わくは諸の衆生^{しゆじやう}悉^{ことごと}く皆出世の文字を受持せよ」

文、像法決疑經^{けつぎきやう}に云く「文字に依るが故に衆生を度し菩提を得」云云、若し文字を離れば何を以てか仏事とせん

禪宗は言語を以て人に示さざらんや若し示さずといはば南天竺の達磨は四巻の楞伽經に依つて五巻の疏を作り慧可に伝うる時我漢地を見るに但此の經のみあつて人を度す可し汝此れに依つて世を度す可し云云、若し爾れば猥に教外別伝と号せんや……」とある。

日蓮大聖人は、文証の有無が、正邪の判定に重要な鍵となることを教えられている。教行証御書（一二七九頁）に念仏を破折されて「次に念仏の……捨閑閑地（しやへいかくほ）の文、此等の本經・本論を尋ねべし……若し慥なる經文なくんば是くの如く權經より実經を謗するの過罪、法華經の譬喩品の如くば阿鼻太城に墮落して展轉無數劫を経歴し給はんずらん」と。また聖愚問答抄上（四八一頁）には「但し仏法は強ちに人の貴賤には依るべからず只經文を先とすべし」と。また「涅槃經の第六には依法不依人（えほうふえにん）とて普賢・文殊等の等覺已還の大薩埵・法門を説き給ふとも經文を手に把らずば用ゐざれとなり、天台大師の云く『修多羅と合する者は録して之を用いよ文無く義無きは信受す可からず』文、釈の意は經文に明ならんを用いよ文証無からんをば捨てよとなり、伝教大師の云く『仏説に依憑して口伝を信ずること莫れ』文……」と。

理 証

道理のこと。いくら文証があるからといって、それが筋道のとおりなものでは万人を納得させ肯定させることはできない。四条金吾殿御返事（一一六九頁）には「仏法と申すは道理なり道理と申すは主に勝つ物なり」とある。古今東西を通じて、一切の人を納得させる性質、普遍妥当性を有するものでなければならぬ。同一原因は同一結果を、時と場所とにかかわらず具現し、かつそれが、最高価値をもたらす結論をもたなければならぬ。しかもその幸福は、万代不易の幸福であつて、何ものにもくずされぬ幸福でなければならぬ。

現証

現実の証拠のこと。たとえ崇高な哲理であつても、それが実際に証明されなければなんにもならない。ゆえに三三藏祈雨事（一四六八頁）には「日蓮仏法をこころみるに道理と証文とはすぎず、又道理証文よりも現証にはすぎず」と、現証が他の二証にすぐれて重要なことを明かされている。

自然科学の各分野においては、思索の結果得たところの理論を実験によって確認する方法に依っているが、宗教においても、この教義を信ずれば幸福になると提唱する以上、自然科学の方式と同じように、その教義が生活上に、はたしていかなる結果をもたらしたか、自他ともに幸福を確認できるかどうかを調べてみなければならない。教行証御書（一二七九頁）に「一切は現証には如かず」と。

【三重秘伝】

三重とは、五重の相對のうち、權實相對、本迹相對、種脱相對の三相對のことであり、この三重の妙旨、特に三番目の種脱相對が、日蓮正宗のみに伝えられてきた法門であり、他門の日蓮宗各派が知らないところから、秘伝というのである。

開目抄上（一八九頁）にいわく「一念三千の法門は但法華經の本門・壽量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知ってしかも・いまだ・ひろいいたさず但我が天台智者のみこれをいだけり」

右の御文を日寛上人は文底秘沈の真文であるとし、三重に分けて、六卷抄の第一に「三重秘伝抄」として著わし、天台の法門との差をはっきりと述べて、日蓮正宗の奥義を明かされている。

すなわち一念三千の法門は、

但法華經……權実相對、第一法門

但本門壽量品……本迹相對、第二法門

但文底……種脱相對、第三法門

等と仰せられている。これが三重秘伝である。

【四重興廢しじゅうこうはい】

宗教批判の原理の一つ。爾前にぜん經、法華經迹門しやくもん、法華經本門、本門の觀心くわんしんと從淺至深じゆうせんしじんして大教の興おこることにより、前の大教が廢すたれる次第しだいを説く教判のことである。すなわち、

① 爾前の大教興れば、外道廢る

② 迹門の大教興れば、爾前廢る

③ 本門の大教興れば、迹門廢る

④ 觀心の大教興れば、本門廢る

以上が四重の興廢であるが、觀心とは天台の教觀相對を意味する場合もあり、ただちに文底下種法門とはいえない。しかし日蓮大聖人が引用される場合には五重相對と同趣旨しゆしであって、觀心とは文底下種、三大秘法の南無妙法蓮華經である。

【五重三段】
ごじゅうさんだん

日蓮大聖人は觀心本尊抄（二四八頁）において、序分・正宗分・流通分の三段を五重に立てられて、一切の教法を批判し、文底下種本門こそ末法の正意なりと立てられている。序分とは一經の序論で、正宗分とは一經の本論であり、流通分とはすでに説かれた經の趣旨を後代に伝える意をもって説かれたものである。

第一重、一代一經三段

- 序分……華嚴・阿含・方等・般若等の法華以前の諸經
- 正宗分……無量義經・法華經・觀普賢經の十卷
- 流通分……涅槃經等

第二重、法華一經十三卷

- 序分……無量義經・序品の十五品半
- 正宗分……方便品より分別功德品の半十九行の偈（「以て無上の心を助く」まで）
- 流通分……分別功德品の半、現在の四信の十一品半と普賢經一卷

第三重、迹門熟益三段

- 序分……無量義經と序品
- 正宗分……方便品より人記品までの八品
- 流通分……法師品より安樂行品までの五品

第四重、本門脱益三段 ほんもんだつちやく

序分……涌出品の半分（「汝等自ら当に是れに因って聞くことを得べし」まで）
正宗分……涌出品の後半分（「爾の時釈迦牟尼仏告げ」から）と寿量品と分別功德品の半分（「一善根を具して以って無上の心を助く」まで）の一品二半
流通分……分別功德品の後半分から觀普賢經まで

以上を通過の四重三段といい、一代仏教の中心は法華經、法華經の中心は方便品から分別功德品の前半分までの十五品半にあり、また迹門十四品と本門十四品の二經に分けられていて、本門十四品の中心は寿量品を中心としたその前後の半分ずつ、いわゆる一品二半であって、迹門の正宗分のおよぶところではないから、法華經の中心は一品二半と示されたものである。

これは釈尊の所説の在世の法華經であって、さらに末法については日蓮大聖人は、寿量文底の意に約して三段に分けられたのである。

すなわち、寿量文底下種の南無妙法蓮華經が、一切の經々の正宗分となる。釈尊の出世の本懷たる法華經といえども、末法出現の御本仏日蓮大聖人の弘通を助けるための種々の説法であつた。

第五重、文底下種三段

序分……十方三世諸仏の微塵の經々
正宗分……寿量文底下種の南無妙法蓮華經
流通分……過去大通智勝仏の法華經から今日の釈迦仏の一代五十余年の諸經ならびに十方三世諸仏の微塵の經々の体内の辺

第五重の正宗分からみれば、第四重の本門脱益三段の正宗分の寿量品は、文上脱益となるのである。

【文底秘沈】

文底とは、文上に対する語。法華經本門壽量品の文底に三大秘法の御本尊を秘し沈められているゆえに、文底秘沈という。

開目抄上（一八九頁）「一念三千の法門は但法華經の本門・壽量品の文の底にしづめたり」の御文による。この御文は、すなわち、文底深秘の真文であり、肝要の御文である。

日寛上人は、この御文によって三重秘伝（本文参照）の深義を著わされ、その三重秘伝抄に「久遠下種名字の妙法は一代經の中には但法華經、法華經の中には、但本門壽量品、本門壽量品の中には但文底に秘沈するなり、ゆえに一念三千文底秘沈と云うなり」と述べられている。この一念三千とは法体ほつたいを示し、御本尊は壽量品の文底に秘し沈められているゆえに、文底秘沈というのである。これについて、古来幾多の異説があるゆえ、日寛上人は開目抄文段にて、次のごとく、正邪の分別を明かされている。

一、文底秘沈文

問うこれいずれの文となすや、答う他家の古抄に多くの義勢あり、乃至、今謂く諸説皆是れ人情なり、何ぞ聖旨に關せん、問う正義如何、答う此れは是れ当流一大事の秘要なり然りしかといえども今一言を以て之を示さん、謂く御相伝に云く「本因妙の文なり云云」若し文上を論ぜば只住上じゅうじょうに在り、ゆえに壽命未盡と云うなり、若し住上に非ざれば曷いずくんぞ常壽を得んや、ゆえにこの文を釈して「初住

に登る時已に常寿を得たり云云」

当に知るべし後後の位に登る所以は並びに前前の所修に由る、ゆえに知んぬ「我本行菩薩道」の文底に久遠名字の妙法を秘沈し給うなり、蓮祖の本因妙抄云云、興師の文底大事抄云云、秘すべし秘す可し云云。

以上のごとく、日寛上人の御文に明白な御教示があるにもかかわらず、日蓮宗の他門流においては、容易にその真実を把握することができない。すなわち迹門始成を簡びて本門寿量をあらわすことまでは説いている者が多いけれども、「文底秘沈」については、まったく見当がつかないでいる。

文底の実義すなわち種脱相對の上において、日蓮大聖人を下種の本仏と拝すべきは当然であり、これこそ宗祖大聖人の深秘の御本尊であり、しかも正しくこれを相伝し、末法の一切衆生を教導しているのは、日蓮正宗のみである。

【文底下種三段】

前項、五重三段によって明らかなように、日蓮大聖人出世のご本懷は文底下種三段にある。その正宗分は久遠元初の唯密の正法たる三大秘法の南無妙法蓮華經である。それ以外の、あらゆる一切經は、ことごとく序分となる。しかして三大秘法の建立されて後は、ことごとくその流通分となる。すなわち、一切の經教の体外（体内体外の項参照）の辺は大御本尊の序分となり、体内の辺は流通分となるのである。

観心本尊抄文段（富要四卷二七七頁） 文底下種の三段とは、正宗は前の如く久遠元初の唯密の正法を以て

正宗と爲す、惣じて一代五十余年の諸經・十方三世の微塵の經經・並びに八宗の章疏を以て或は序分に屬し或は流通に屬す、謂く彼の体外の辺は以て序分と爲す、彼の体内の辺は以て流通に屬するなり、其の証如何、謂く序分は前の如し、若し流通の意は宗祖云く「此の大法を弘通せしむるの法は必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏を習學すべし等云云」(一〇三八頁)即ち此の文意なり、故に知んぬ今は但迹本二門を用いて流通と爲るは仍是れ文略なり、則ち知んぬ今此の三段は三世諸仏の微塵の經經一塵も余すことなく・十方法界の露一滴も漏らさず皆咸く文底下種の序・流通なり。

この文で「迹本二門を用いて流通と爲る……」とは、觀心本尊抄の御文が迹門と本門をあげて流通分を説明なされているからである。

【流通分】

法華經本迹二門とも末法の流通分として依用されることは、觀心本尊抄の文底下種三段に明らかところであるが、なお次に流通分の意義を示せば、次のように述べられている。

四信五品抄(三三八頁) 流通の一段は末法の明鏡尤も依用と爲すべし、而して流通に於て二有り一には所謂迹門の中の法師等の五品・二には所謂本門の中の分別功德の半品より經を終るまで十一品半なり。

觀心本尊抄(二五〇頁) 寿量の法門は滅後の為に之を請するなり。

觀心本尊抄(二五二頁) 前の五神力は在世の為後の五神力は滅後の為なり、爾りと雖も再往之を論ずれば一

向に滅後の為なり。

法華取要抄（三三三） 方便品より人記品に至るまでの八品に二意有り……逆次に之を読めば滅後の衆生を以て本と為す……本門に於て二の心有り一には涌出品ゆじゆつぽんの略開近顯遠りやつかいこんけんのんは前四味並に迹門の諸衆をして脱せしめんが為なり、二には涌出品の動執生疑どうしゆうしやうぎより一半並びに寿量品・分別功德品の半品已上一品二半を広開近顯こうかいこんけん遠と名く一向に滅後の為なり……誰人の為に広開近顯遠の寿量品を演説するや、答えて曰く寿量品の一品二半は始より終に至るまで正く滅後衆生の為なり滅後の中には末法今時の日蓮等が為なり。

御義口伝下（七六六） 惣じては流通とは未来当今の為なり、法華經一部は一往は在世の為なり再往は末法当今の為なり、其の故は妙法蓮華經の五字は三世の諸仏共に許して未来滅後の者の為なり、品品の法門は題目の用なり体の妙法・末法の用たらば何ぞ用の品品別ならむや。

百六箇抄（八六四） 本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の為なり、然る間・日蓮修行の時は後の十四品皆滅後の流通分なり。

百六箇抄（八六七） 応仏おうぶつと天台とは正宗一品二半を本門と定め現文の勝劣、報仏ほうぶつと日蓮とは流通を本と定む文底の勝劣なり。

曾谷殿御返事（一〇五五） 既に上行菩薩・釈迦如来より妙法の智水を受けて末代惡世の枯槁ここうの衆生に流れかよはし給う。

御本尊七箇の相承（富要一卷三二） 序正流通の中には何れぞや、師の曰はく流通分の大曼荼羅なり流通とは末法なり、久遠本果の名字の妙法蓮華經の法水末代我等が耳に流入す可しと云ふ三仏釈迦・多寶・分身の御約束

なり、在世は正宗が面と成り・滅後は流通が面と成るなり、經文解釈分明なり。

三位日順・摧邪立正抄さいじやりつしょうしやう（富要一卷四一） 正宗は在世の衆生を化し、流通は滅後の相を示す。

以上のごとく一往法華經をみれば、在世の衆生は釈尊正宗分の寿量品においてことごとく成仏し、この時には上行菩薩が釈尊の化導を助けるために出現したのである。しかし、末法にいたって再往これをみれば、釈尊の法華經は、末法出現の御本仏日蓮大聖人の弘通を助けるために種々の説法をしており、これがすなわち流通分である。ゆえに日蓮大聖人は文底下種仏法を弘通せられるにあたり「此の大法を弘通せしむるの法には必ず一代の聖教を安置し八宗の章疏しょうじよを習学すべし」（曾谷入道等許御書一〇三八）等と述べられているのである。また日蓮大聖人は、究竟くきやうの極説たる本門戒壇の大御本尊を建立された弘安二年をもって正宗分となすべきはもちろんのことであるが、滅後の流通分として三大秘法広宣流布・本門戒壇建立を末代に遺付いふされたのである。

【一品二半いっほんにはん】

一品二半とは法華經の寿量品の一品と、涌出品の半品および分別功德品の半品である。この一品二半には二意がある。いわゆる天台所立しやうりゆうの一品二半と、日蓮大聖人が、文底下種の正宗分として用いられている一品二半である。

観心本尊抄（二四九） 一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教ふさうと名く。

観心本尊抄（二四九） 在世の本門と末法の始は一同に純円じゆんえんなり但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此

れは但題目の五字なり。

すなわち前者の文は日蓮大聖人ご正意の一品二半であり、後者の文は天台所立の在世脱益の一品二半である。日蓮大聖人出世の本懐は、久遠元初の自受用身として三大秘法の御本尊を建立され、われら民衆に授与することにある。それを最も明らかに表明されているのは文底下種三段である。この文底下種三段において、正宗分として述べられている文は「寿量の序分なり」の「寿量」と、「一品二半よりの他は小乗教・邪教云云」の「一品二半」である。「寿量」と「一品二半」とは名前は異なるが同じく文底下種仏法の正宗分である。また脱益の三段にも一品二半がある。文底下種三段にも一品二半がある。言葉は同じであるけれども、その義の異なることを知らなくては、文底下種仏法の真意はわからないのである。いまこれを明らかにするため、一品二半をここに示して、しかる後にこれを説明する。

一品二半とは涌出品の後の半品と、寿量品と、分別功德品の前の半品をいうが、天台の配立と日蓮大聖人の配立とは、涌出品の半品において相違がある。天台の涌出品の半品は、略開近顚遠と動執生疑とをもって涌出品の半品として、日蓮大聖人の配立では、動執生疑だけをもちて涌出品の半品としているのである。

從地涌出品の半品の文は次のとおり。

(天台の配立はこれより)

略開近顚遠の文

爾の時に世尊、是の偈を説き已って、弥勒菩薩に告げたまわく、我今、此の大衆に於いて汝等に宣告す。阿逸多、是の諸の大菩薩摩訶薩の、無量無數阿僧祇にして地より涌出せる、汝等昔より未だ見ざる所の者は、我是の娑婆世界に於いて、阿耨多羅三藐三菩提を得已って、是の諸の菩薩を教化示導し、其の

心を調伏して、道の意を發さしめたり。此の諸の菩薩は、皆是の娑婆世界の下、此の界の虚空の中に於いて住せり。諸の經典に於いて、読誦通利し、思惟分別し、正憶念せり。阿逸多、是の諸の善男子等は、衆に在って多く所説有ることを樂わず、常に靜かなる處を樂い、勤行精進して、未だ曾て休息せず。亦、人天に依止して住せず。常に深智を樂つて、障礙有ること無し。亦常に諸仏の法を樂い、一心に精進して無上慧を求む。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、阿逸汝当に知るべし、是の諸の大菩薩は、無數劫より來、仏の智慧を修習せり、悉く是れ我が所化として、大道心を發さしめたり、此等は是れ我が子なり、是の世界に依止せり、常に頭陀の事を行じて、靜かなる處を志樂し、大衆の憒鬧を捨てて、所説多きことを樂わず、是の如き諸子等は、我が道法を學習して、昼夜に常に精進す、仏道を求むるを爲つての故に、娑婆世界の、下方の空中に在って住す、志念力堅固にして、常に智慧を勤求し、種種の妙法を説いて、其の心畏るる所無し、我れ伽耶城、菩薩樹下に於いて坐して、最正覺を成ずることを得て、無上の法輪を轉じ、爾して乃ち之を教化して、初めて道心を發さしむ、今皆不退に住せり、悉く当に成仏を得べし、我今実語を説く、汝等一心に信ぜよ、我久遠より來、是れ等の衆を教化せり。

動執生疑の文

(これより日蓮大聖人の配立)

爾の時に弥勒菩薩摩訶薩、及び無數の諸の菩薩等、心に疑惑を生じ、未曾有なりと怪んで、是の念を作さく、云何ぞ世尊、少時の間に於いて、是くの如き無量無辺阿僧祇の諸の大菩薩を教化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたまえる。即ち仏に白して言さく、世尊、如来太子たりし時、釈の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり。是れより已來、

始めて四十余年を過ぎたり。世尊、云何ぞ此の少時に於いて、大いに仏事を作したまえる。仏の勢力を以てや、仏の功德を以てや、是の如き無量の大菩薩衆を教化して、当に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしめたもうべき。世尊、此の大菩薩衆は、仮使人有て、千万億劫に於いて、数うとも尽くすこと能わす。其の辺を得じ。斯等は久遠より已来、無量無辺の諸仏の所に於いて、諸の善根を植え、菩薩の道を成就し、常に梵行を修せり。世尊、此の如き事は、世の信じ難き所なり。譬えば人有て、色美しく、髪黒くして年二十五なる、百歳の人を指して、是れ我が子なりと言わん。其の百歳の人、亦年少を指して、是れ我が父なり我等が生育せりと言わん。是の事信じ難きが如く仏も亦是の如し。得道より已来、其れ実に未だ久しからず。而るに此の大衆の、諸の菩薩等は、已に無量千万億劫に於いて、仏道の為の故に勤行精進し、善く無量百千万億の三昧に入出住し、大神通を得、久しく梵行を修し善能く次第に諸の善法を習い、問答に巧みに、人中の宝として、一切世間に甚だ為れ希有なり。今日世尊、方に仏道を得たまひし時、初めて発心せしめ、教化示導して、阿耨多羅三藐三菩提に向わしめたりと云う。世尊、仏を得たまひて未だ久しからざるに、乃し能く此の大功德の事を作したまへり。我等は復、仏の随宜の所説、仏の所出の言、未だ曾て虚妄ならず、仏の所知は、皆悉く通達し給えりと信ずと雖も、然も諸の新発意の菩薩、仏の滅後に於いて若し是の語を聞かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因縁を起さん。唯然なり世尊、願わくは為に解説して、我等が疑を除きたまえ。及び未来世の諸の善男子、此の事を聞き已りなば、亦疑を生ぜじ。

爾の時に弥勒菩薩、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、仏昔釈種より、出家して伽耶に近く、菩提樹に坐したまえり、爾しより来尚未だ久しからず、此の諸の仏子等は、其の數量るべからず、久し

く已に仏道を行じて、神通智力に住せり、善く菩薩の道を学して、世間の法に染まざること、蓮華の水に在るが如し、地より涌出し、皆恭敬の心を起して、世尊の前に住せり、是の事思議し難し、云何ぞ信すべき、仏の得道は甚だ近く、成就したまえる所は甚だ多し、願わくは為に衆の疑を除き、実の如く分別し説きたまえ、譬えば少壯の人、年始めて二十五なる、人に百歳の子の、髪白くして面皺めるを示して、是れ等我が所生なりといい、子も亦是れ父なりと説かん、父は少く子は老いたる、世を挙げて信ぜざる所ならんが如く、世尊も亦是くの如し、得道より来甚だ近し、是の諸の菩薩等は、志固くして怯弱無し、無量劫より来、而も菩薩の道を行ぜり、難問答に巧みにして、其の心畏るる所無く、忍辱の心決定し、端正にして威徳有り、十方の仏の讃めたもう所なり、善能く分別し説けり、人衆に在ることを樂わず、常に好んで禪定に在り、仏道を求むるを爲つての故に、下の空中に於いて住せり、我等は仏に従つて聞きたてまつれば、此の事に於いて疑無し、願わくは仏未來の爲に、演説して開解せしめたまえ、若し此の經に於いて、疑を生じて信ぜざること有らん者は、即ち當に惡道に墮つべし、願わくは今爲に解説したまえ、是の無量の菩薩をば、云何にしてか少時に於いて、教化し發心せしめて、不退の地に住せしめたまえる。(以上經文)

このように一品二半といつても、文上脱益の一品二半と文底下種の一品二半は、名前は同じでも義は異なるのである。この名同義異の義異はどうして生じたかというに、天台の配立は在世脱益のためであり、日蓮大聖人の配立は末法下種のためだからである。

また、天台の配立を略広開近顯遠の一品二半といい、日蓮大聖人の配立を略広開近顯遠の一品二半と名づけるのである。されば一品二半と寿量品は同じであるゆえに、天台の配立を略広開近顯遠の寿量品、日蓮大聖人の

配立を広開近顓遠の寿量品と名づけるのである。また天台の一品二半を在世の本門と呼び、日蓮大聖人の一品二半を末法の本門と名づけるのである。

日蓮大聖人の一品二半が一向に滅後末法のためであることは左の御書に明らかである。

法華取要抄（三三四頁） 本門に於て二の心有り一には涌出品ゆじゆつぽんの略開近顓遠は前四味並に迹門の諸衆をして

脱せしめんが為なり、二には涌出品ゆじゆつぽんの動執生疑どうしゅうしやうぎより一半並びに寿量品・分別功德品の半品已上一品二半を広

開近顓遠かいこんけんのんと名く一向に滅後の為なり……問うて曰く誰人の為に広開近顓遠の寿量品を演説するや、答えて曰

く寿量品の一品二半は始より終に至るまで正しく滅後衆生の為なり滅後の中には末法今時の日蓮等が為なり。

その他、観心本尊抄（二四九頁）に「彼は一品二半此れは但題目ただの五字なり」と仰せられ、また本因妙抄

（八七七頁）に「迹の上の本門寿量ぞと得意とくい云云」等とあるように、法華經本門が迹門の衆生を得脱せしめ、

迹門の説法を証するための本門寿量品であると考え、脱益の文の上と申すのであり、文底とは「久遠実成

の名字の妙法を余行にわたさず直達じきたつの正觀しょうくわん云云」と仰せられている辺からも明らかである。

これによって略広開近顓遠の一品二半は、第四の本門脱益三段の正宗分であり、広開近顓遠の一品二半は、

第五の文底下種三段の正宗分であることがわかるであろう。

しこうして、日蓮大聖人はなぜ天台の略開近顓遠を除き、動執生疑どうしゅうしやうぎの半品をもって正宗分になされたかとい

うに、これに深意がある。寿量品は一つの文ではあるが、その意には両辺がある。文上は在世脱益のため、文

底は末法下種のためである。ここにおいて弥勒菩薩の疑請する内容から考えれば「我等は復また、仏の随宜ずいぎの所説、

仏の所出しよすいの言みこと、未だ曾かつて虚妄こもうならず、仏の所知は、皆悉ことごとく通達し給えりと信ずと雖も」との意よりして、

文上脱益在世のための寿量品を略開近顯遠に属せしめ「然も諸の新発意の菩薩、仏の滅後に於いて、若し是の語を聞かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因縁を起さん」との意よりして、文底下種末法のための寿量品を動執生疑の文に属せしめるのである。これすなわち、弥勒の質問した内容によって、日蓮大聖人はこのように立て分けられたのである。

しかるに、日什（顯本法華宗の開祖・日蓮大聖人滅後百年ごろ）門流では、一品二半の南無妙法蓮華經と云っているが、これは彼の門流はいまだに文底の大事を知らないから、第四の三段、在世脱益の一品二半をとっているにすぎない。

ここに日蓮大聖人の内証の一品二半がはっきりとして、末法の真の仏法、文底下種の本尊が確立すれば、他はすべて小・邪・末・覆の教にはかならないのである。

【地涌の菩薩】

法華經從地涌出品第十五において、釈迦の説法を助け、滅後の弘教を誓った本化の菩薩のこと。すなわち、宝塔品より仏が滅後の弘經を勧進し、大菩薩衆は勸持品で滅後弘經の誓願を立てたが、涌出品にいたって「止みね善男子」といって諸大菩薩の弘經を制止した時、忽然として大地より涌出したのが、地涌の菩薩である。地涌の大士、地涌千界の大菩薩、本化の菩薩、四大菩薩ともいう。無量無數の大菩薩中に四人の大導師があり、上行、無辺行、淨行、安立行の四菩薩がこれである。しかして本化地涌の出現に疑いをもち、その大衆の

疑問に応じて寿量品の説法があつて後、神力品にいたつて地涌の菩薩に付嘱がなされたのである。末法にご出現の日蓮大聖人は、すなわち地涌の大導師・上行菩薩の再誕であらせられることは、諸御書に明かされているところである。

百六箇抄（八六四頁） 本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の爲なり、然る間・日蓮修行の時は後の十四品皆滅後の流通分なり。

要するに本門の序分は、迹化他方の菩薩では、わが内証の寿量品を譲り与えることができない、本化の菩薩でなければ末法において、この大御本尊の弘教はできないとして、地涌の菩薩を呼び出したのである。この序分では、末法において大御本尊を弘通すべき人および資格を定められたものである。

さて迹化・他方・本化の菩薩とはいかなる菩薩をさすかというに、一には菩薩所住の所に約すのと、二には仏の本迹に約して定まるのである。

第一に菩薩所住の所に約すならば、本化の菩薩とは下方空中に住するゆえに下方というのである。この菩薩については、

御義口伝上（七五一頁） 此の四菩薩（本化）は下方に住する故に釈に「法性之淵底玄宗之極地」と云えり、下方を以て住处とす下方とは真理なり、輔正記に云く「下方とは生公の云く住して理に在るなり」と云云、此の理の住处より顕れ出づるを事と云うなり。

また他方の菩薩とは、この娑婆世界以外の仏国土に住する菩薩をさす。すなわち薬王、観音、妙音等である。この他方の菩薩に対して文殊、弥勒等の迹化の菩薩を旧住の菩薩というのである。

第二に仏の本迹の教化に約するならば、すなわち下方の菩薩は、仏の本地において教化した菩薩であるから本化といい、経に「我久遠よりこのかた来是等の衆を教化せり」といつているのである。文殊等の菩薩は、仏が迹中に教化した菩薩であるから迹化といい、また他方の菩薩は本地の教化でもなく、迹中の教化でもない、ただ他仏の弟子であるから、他方というのである。もしこの意を知るならば、この三種の菩薩とわれらとの関係の親疎ちそがおのずから明らかとなるであろう。

御義口伝上（七五一頁）に「本化の菩薩の所作としては南無妙法蓮華経なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切衆生を靈山浄土へ引導する事なり、末法の導師とは本化に限ると云うを師と云うなり」とある。本化の菩薩は本来、南無妙法蓮華経を受持しきつた振舞いである。迹化の菩薩と本化の菩薩とは、根本的な相違がある。

諸法実相抄（一三六〇頁）日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事に疑はんや……末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり、日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是めに地涌の義に非ずや、剩あまつさへ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的まととするなるべし。

所詮しよせん、地涌の菩薩とは、日蓮大聖人の弟子であり、御本尊を受持し、ひたすら、広宣流布に邁進まいしんする人である。

また、四菩薩は常樂我淨じょうらくがじじょうの四徳を表わしている。この点については別項で解説をする。

【壽量品の三妙合論】

三妙合論とは、仏自らの因果と、所住の国土とに約して、時間、空間にわたって生命の眞実の姿を明かされたものである。

三妙とは、天台大師が法華玄義に立てた本門の十妙、すなわち本因妙・本果妙・本国土妙・本感応妙・本神通妙・本說法妙・本眷属妙・本涅槃妙・本壽命妙・本利益妙のなかの、本因妙・本果妙・本国土妙をいい、法華經壽量品第十六にこの三妙が整足して説かれている。壽量品の三妙合論とは、

一、本因妙……我本行菩薩道の文

二、本果妙……我実成仏已來の文

三、本国土妙……娑婆世界說法教化の文

すなわち、本因妙とは仏の境涯を得るための根本の原因、仏になるための修行をいい、本果妙とは仏の本體、本地であり、本国土妙とは仏の所住の国土で、このように、仏の本因、本果、本国土が説かれてこそ、生命の眞実の姿が明らかになる。壽量品で三妙が説かれて、釈迦の行動、實際生活をとおして一念三千が説かれるのである。したがって仏の實體が明瞭でない迹門を理といい、本門を事というのである。

だが、これは五百塵点劫久遠実成の釈迦の三妙で、末法の御本仏日蓮大聖人すなわち久遠元初の教主釈尊の三妙とにおいて格段の相違がある。

三妙合論でいうところの本因妙とは九界の意であるから、九界の代表としての血脈付法けちみやくふほうの日興上人にあたり、本果妙は仏界であるから日蓮大聖人、本国土妙は日本国の中にも、大御本尊のいます富士大石寺となるのである。この三妙合論がいかに重要であるかを、さらに解説する。

仏は浄土のみにいて、娑婆世界しゃはにはいないというのが、法華經以前の説である。しかし、寿量品には「娑婆世界」といって本国土妙が説かれている。それは仏が娑婆世界に凡夫と共に、菩薩と共に、また声聞・縁覺と共に、あるいは畜生・餓鬼などと共に、皆いっしょに十界のおのおの同居している。この不思議さを本国土の妙というのである。仏の本国というものは娑婆世界であるというのである。

しかもその仏の境涯を得るのは本因があり、それが「我本行菩薩道がほんぎようぼさどう」というところである。

「我実成仏已来がじつじょうぶういらい」これは、仏の本体である。すなわち、文底よりこれを論じると、御本尊にあたる。これを文上においては「五百千万億那由佗阿僧祇なゆたあそんぎの三千大千世界があつて、これをすりつぶして粉として」というところが、御本尊の境智をおっしゃっているのである。

すなわち、文底からこれを論ずると、大宇宙即御本尊であり、南無妙法蓮華經の生命というものは、「我実成仏已来」我れ仏を得てよりこのかた、仏になってよりこのかた大宇宙と共にあると読むべきが文底である。

しかも娑婆国土以外には、本当の仏はいないのである。娑婆にいない仏は迹仏しやくぶつであり、権仏ごんぶつである。娑婆世界におられる仏こそ、真実の仏である。

その仏になるには、みな菩薩の道を行じたのである。「我本行菩薩道」である。しかし、これを文底より論じていくところに、本果妙の釈尊の仏法と、本因妙の教主釈尊との相違が、はっきりしてくるのである。

というのは、文上から、これをこのまま眺めても「我実成仏已来」ということは、すなわち御本尊の本体である。ゆえに、この御本尊の本体を本体として、釈尊が姿を現じているから、本果の世界を現わしているのである。ところが日蓮大聖人になると、仏自体の立派な姿を現じられない。すなわち、仏になる本因を論じ、仏になる本因を行ずるのである。ゆえに本因妙の仏という以外にないのである。日蓮大聖人が生まれながらにして御本尊の体を現わし、御本尊の行を行じられたならば、それは菩薩道でなくなるのである。

菩薩道というのは、菩提薩埵ぼだいさつたといって、仏になる道を行ずるのをいうのである。

御書のどこを拝読しても、われ仏になって、靈山であなた方を救ってやるとか、これだけの難を忍んだので、私はそのうちに仏になれるだろうと書いてはいないのである。日蓮大聖人のご行動は、本地内証の位においては、仏でいらせられても、行ずるところは、菩薩道である。その菩薩を一括いっかくして、すなわち文上でいえば、五十二位の本因初住の文底にあるところの南無妙法蓮華經という、仏の本体を直接信じて、われわれは仏になるのであるから、日蓮大聖人の仏法は本因の妙なのである。ゆえに日蓮大聖人を本因の仏と称し、寿量文上の仏をもって本果の仏と称し、ここに本果妙と本因妙の区別があるのである。

【三時の弘教さんじ　ぐきょう】

釈尊滅後、正法一千年、像法一千年、末法万年の三時に、論師、人師が出現し、時代の衆生の機根きこんに応じた法を説き、一切衆生を救うという次第の順序をいう。

正法一千年間の弘教

釈尊の在世中に、弘宣付嘱、伝持付嘱を受けたといわれる付法蔵の二十四人が、次々と生まれてきて、仏法を伝持弘通してきた。これら付法蔵の導師は、正法時代の四依の菩薩として、その時代相応の教法を弘めた。すなわち、摩訶迦葉が釈尊から付嘱を受け、付法蔵第五の提多迦までの百年間は、ただ小乗教だけを弘通した。

次の弥遮迦より付法蔵第十の富那奢までは、正法の前の五百年・解脱堅固の時代に小乗教を面として、ごくわずかの大乘教を弘通した。

正法の後の六百年から一千年までの五百年間には、馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅睺尊者・僧伽難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子尊者等が出現し、初めは外道を学び、次に小乗教を究めて、後には諸大乘教をもって、諸小乗教をさんざんに打ち破っている。これらの諸大菩薩たちは、大乘教をもって小乗教を破ったが、諸大乘教と法華経との勝劣は分明に説いてはいない。大小相対を立てたのみで権実の相対は立てなかった。法華経の肝要たる本迹の十妙、迹門の二乗作仏、本門の久遠実成、已今当最為第一の妙、百界千如、一念三千等の法門は分明には説いていない。これらは正法の後の五百年で、大集経の禪定堅固にあたる時代であった。

像法一千年間の弘教

正法時代一千年を過ぎた後は、インドに仏法が充満していたが、あるいは小乗をもつて大乘を破り、あるいは権教をもって実教を隠没するというように、仏法がさまざまに乱れたので、得道する者はようやく少なくなり、仏法によって悪道に墮ちる者が多くなった。像法時代には、いって十五年、仏法が中国へ渡った。像法の前半五百年のうち、初めの百年間は、中国の道教とインドの仏法

との論争が激しく行なわれ、いずれが真実とも決定しかねており、たとえ仏法が真実なりと決定しても、深く信ずる人はいなかった。

このような状態であったから、仏法のなかにも大乘・小乗の別、権教・実教の別があるなどと立て分けるならば、同じ仏教のなかに相違があるので、疑いを起こしてかえって退転し、外道につく者が出てくる。このような恐れがあったから、最初に仏教を伝えた摩騰、竺蘭は自分では知っていたが、大小とか権実の立て分けは何もいわないでいた。

その後、魏・晋・齊・宋・梁の五代の間、仏法のなかで、大小・権実・頭密を争ったが、おのおの流派を生ずるばかりで、何が正当か決定できなかった。このときは、南三北七といって、仏法は十派に分裂していた。

すなわち、南には三時・四時・五時とそれぞれの教判を立てる三派が生まれ、北には五時・半満・四宗・五宗・六宗・二宗の大乘・一音等とそれぞれの教判のもとに、偏執して争っていた。しかし、これらの十派の主張の綱は南の三派中の第三、光宅寺の法雲に代表される華嚴經第一、涅槃經第二、法華經第三に一致していた。この時、出現した天台（西紀五三八―五九七年）は、五時八教、三種教相等の最高の教判を示して、公場対決により十宗を屈伏せしめ、法華經迹門の広宣流布を成し遂げたのである。そして、理の一念三千、三諦円融等の法門を説き、弟子・章安に、摩訶止観を説くことによって、出世の本懐を遂げた。こうして、像法の初めの五百年、読誦多聞堅固の時代は、天台の法華經を根底とした、隋・唐時代の華やかな文化が築かれたのであった。

天台の死後、玄奘三蔵が「法華經は勝れた經であるが、深密經には劣る」と主張した。法藏法師等も、天台に打破られた華嚴經を持ち出し、その後、新訳された華嚴經をもって「一華嚴、二法華、三涅槃」の邪義をか

まえた。さらに後世まで、大きな悪影響をおよぼしたのは、善無畏、金剛智、不空らの真言宗である。彼らの説は「華嚴・深密・般若・涅槃・法華経等の勝劣は、顯教内の勝劣であり、釈尊の説法の範圍である。大日経は、大日如来の説法であつて、法華経の顯教と相對すれば彼の諸経は民の万言、この大日経は天子の一言である。華嚴経、涅槃経は梯を立ててもおよびもつかないが、法華経は大日経に相似た経である。しかし、法華経は釈尊の所説で、民の正直語で、この大日経は大日如来の説、天子の正言である。正言である点では似ているけれども、仏の資格は、釈尊と大日如来とでは、天地雲泥である」と誑言を吐いたのである。

しかも、この誤りを指摘する人もないまま、諸宗はすべて真言宗に転落してしまった。天台宗第九祖の妙樂は、このままに過ぎるならば、天台宗の正義も滅びてしまふだろうと考え、天台の本疏について註釈書を三十卷つくつた。摩訶止観輔行伝弘決、法華玄義釈籤、法華文句疏記である。この三十巻の書は、本書の中で重複しているところは一方を削り、意味の明瞭でないものは、これをはっきりしたのみか、天台の時代にはなかったために、天台の破折をのがれていた法相宗と華嚴宗と真言宗とを、一時に論破した書である。かくして、天台の正義が再び宣揚されたが、妙樂の死後は、衰亡の一途をたどつていった。しかし、妙樂の弟子・行滿座主および道遷和尚のとき、日本の伝教が唐に渡り、一心三觀一念三千の深旨を伝付せられた。こうして、伝教は南都六宗の邪義を徹底して責めたため、南都六宗七大寺の学者は蜂起し、烏合した。延暦二十一年（八〇二年）正月十九日、桓武天皇は、高雄寺に行幸になり、七大寺の学僧と伝教を召しあわせ、公場対決を命じられた。六宗の学僧たちは、一一に経や論釈に照らして責められ、一言も答えられなかった。天皇も驚かれて、伝教に詳しくお尋ねがあり、重ねて勅宣を下して十四人の学者たちを厳しく責められたので、みな帰伏の謝り状を

奉^{たてまつ}

った。この伝教の仏教統一は、仏教の真髓^{しんずい}が、法華經の哲学にあり、天台の五時八教の教判、理^りの一念三千、三諦^{さんたい}円融^{えんゆう}の法門等を最高の法理として認めさせたことに大きな意義がある。八二三年、伝教の入滅の直後、迹門の戒壇の建立が聴許^{ちやうきょ}せられてゐる。しかし、中国の天台宗が善無畏等によって、真言に転落したのに対し、日本においても、弘法が、天台宗の正義を乱す元凶^{げんきゆう}となつた。

清澄寺大衆中（八九三）に「真言宗は法華經を失う宗なり、是^{これ}は大事なり……日本国の法華經の正義を失うて一人もなく人の惡道に墮^おつる事は真言宗……」とある。

伝教は中国へ留学^{りゆうがく}して帰るとき、天台、真言をわが国へもつてきて、天台宗を日本の皇帝に授け^{さづ}、真言を六宗の僧に習学させた。その後、伝教は、真言をはっきりと破折しなかつたが、その原因は、一には、戒壇を建てるか否かの争論が激しかったため、なるべく敵を少なくして戒壇を建立せんがためであり、二には、末法に破折させようと残されたものと思われる。しかし、伝教の依憑^{えひよう}集では、はっきりと真言を破折している。その後、真言宗は開祖の弘法、天台宗の慈覺^{じかく}らの惡僧によってますます邪義が激しくなつた。弘法は、十住心論、秘藏宝鑰二教論に、法華經は大日經に対すれば「戯^{たわむ}れの論」であり「大日如来に比べたら釈迦は無明^{むみよう}の辺域^{へんいき}である」とか、「天台が真言の醍醐^{だいご}を盗んで天台宗を醍醐と定めた」と反対のことをいうにいたつた。後には慈覺・智証^{ちしやう}は、身は天台の座主でありながら、真言を第一とし、理同事勝^{りどうじしやう}と立てている。

結局、誰もこの邪義を破折するものがないままに、日本国中に、真言の邪義が弘まつた。これは、承久^{じやうきゆう}の乱による、後鳥羽上皇等、三上皇が、鎌倉幕府の手によって島流しにされるといふ現実を生み、このことは、真言亡国の現証といえよう。像法時代は、中国、日本と、天台宗の法華經迹門が流布されたが、結局、真言の

惡法により、亡国の姿となって、末法にはいったのである。

末法の御本仏日蓮大聖人の御弘通

末法にはいつて二百二年、建長五年（西紀一二五三年）四月二十八日、

日本の国に初めて末法の衆生を救う三大秘法の南無妙法蓮華經が唱え

られた。日蓮大聖人が御年三十二歳にして、末法の一切衆生を救わんと立宗宣言をなされたのである。報恩抄

（三二八頁）に「問うて云く天台傳教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り……一には日本・乃至一

閻浮提・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇

士となるべし、二には本門の戒壇、三には日本・乃至漢土・月氏・一閻浮提に人ごとに有智無智をきらはず一

同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱うべし、此の事いまだ・ひろまらず一閻浮提の内に仏滅後・二千二百二

十五年が間一人も唱えず……」とある。この御文は三大秘法を顯わされた御文で、きわめて重要な意味があ

る。第一には日蓮大聖人の三大秘法は、釈迦も含めて、滅後、迦葉、阿難、馬鳴、竜樹、天台、傳教等のいま

だかつて弘通したことのない大白法なのである。その理由を曾谷入道等許御書（一〇二八頁）に「一には自身

堪えざるが故に二には所被の機無きが故に三には仏より譲り与えられざるが故に四には時来らざるが故なり」

と教示になっている。すなわち、日蓮大聖人は、久遠元初以来、文底秘沈の名字の妙法を受持されていたゆえ

に、自身能堪であられ、また末法の衆生の機根は本因下種の機であるから、日蓮大聖人は本因下種の要法たる

三大秘法を弘められたのである。また付嘱については文底本因妙は迹化の菩薩に対しては付嘱されず、ただ本

化地涌の菩薩にかぎり付嘱があったのである。また時については、後五百歳中広宣流布とあるように、日蓮大

聖人の三大秘法こそ末法流布の大白法なのである。さて、三大秘法の相貌については、報恩抄の文に説き明か

されている。

すなわち、本門の本尊については「本門の教主釈尊を本尊とすべし」（三二八頁）とあるが、これは、人本尊を示されたものである。教主釈尊には、多くの義があり、藏教、通教、別教、法華經迹門、本門、本門寿量品文底下種の教主釈尊とある。ここに仰せの教主釈尊とは、本門寿量品文底下種の教主釈尊である。すなわち、久遠元初の自受用身であられ、末法に日蓮大聖人とご出現の教主であらせられる。この久遠名字の釈尊は人法一箇であらせられ、本尊となすところの教主釈尊とは、事行の一念三千の大曼荼羅である。本門の題目については「一同に他事をすてて」が信、「南無妙法蓮華經と唱う」とは行の題目である。本門の戒壇については三大秘法抄等にお示しのとおりである。また同じく報恩抄（三二九頁）に「日蓮が慈悲曠大じひこうだいならば南無妙法蓮華經は万年の外・未来までもながるべし、日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ、此の功德は伝教・天台にも超へ竜樹・迦葉にもすぐれたり、極樂ごくらく百年の修行は穢土えど一日の功德に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか」と仰せであるが、ここで、日蓮大聖人の三徳を明かされ、末法の御本仏たることを証明されている。「日蓮が慈悲……未来までもながるべし」は親の徳、「日本国の一切衆生の盲目をひらける功德あり」は師の徳、「無間地獄の道をふさぎぬ」は主の徳。そしてこの主師親の三徳を具備した日蓮大聖人の功德は、迹仏たる天台・伝教にも超えるものであると結ばれている。さて、この三大秘法は、末法今時にこそ、必ず流布する大法なのである。

撰時抄（二六四頁）には妙法流布の必然を次のように明かされている。

「今末法に入つて二百余歳・大集經の於我法中・闢諍言訟・白法隱没実の時にあたれり仏語まことならば定んで

一閻浮提に鬭諍起るべき時節なり、……是をもつて案ずるに大集經の白法隱没の時に次いで法華經の大白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事を疑うべからざるか、……大地は反覆すとも高山は頽落すとも春の後に夏は来らずとも日は東へかへるとも月は地に落つるとも此の事は一定なるべし」とある。

歴史的にみて、当時は、世界中が戦乱のなかにあった。日本では、承久の乱により三上皇が島流しされ、天皇が廢せられた翌年（西紀一二二二年）に、日蓮大聖人は御誕生になった。その後も国内には内紛や謀叛が相次いで起こり、中国大陆では蒙古の勃興により各国が征服されて、次第に日本にもその危機が迫りつつあった。弘安二年（西紀一二七九年）には南宋が滅びている。西は中央アジアからヨーロッパに、東は朝鮮半島までことごとく蒙古の版図にはいつてしまった。西洋では東ローマ帝国が滅亡しラテン帝国の時代であり、第五次、第六次、第七次の十字軍が派遣されて、激烈な宗教戦争が戦われていた。この時には国が滅亡することはなかったが、日蓮大聖人滅後六百数十年にして、日本は世界の各国と大戦争し、ついに敗戦亡国の運命に陥った。

この第二次世界大戦こそ、釈尊の予言した前代未聞の大鬭諍であり、この時こそ、化儀の広宣流布の時機と確信し、創価学会は立ち上がったのである。

【五五百歳広宣流布】

末法において、日蓮大聖人の三大秘法の大仏法が、日本国中、さらには全世界に弘まることであり、「五五

百歳」とは、釈尊が大集經に未來の時を予言して説いているように、釈尊滅後第五番目の五百年、闍諍堅固の時、すなわち末法をいう。

「我が滅後に於て五百年の中は解脱堅固・次の五百年は禪定堅固 已上 一の五百年は讀誦多聞堅固・次の五百年は多造塔寺堅固 已上 二の五百年は我が法の中に於て闍諍言訟して白法隱没せん」と。また法華經の第七葉王品には「我が滅度の後・後の五百年の中に広宣流布」と。

彌勒菩薩の瑜伽論に云く「東方に小国有り其の中に唯大乘の種姓のみ有り」

肇公の翻經の記に云く「大師須梨耶蘇摩左の手に法華經を持し右の手に鳩摩羅什の頂を摩で授与して云く仏

日西に入つて遺耀將に東に及ばんとす此の經典東北に縁有り汝慎んで伝弘せよ」

遵式の筆に云く「始め西より伝う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の昇るが如し」

根本大師の記に云く「代を語れば則ち像の終り末の初・地を尋ねれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則ち五

濁の生・闍諍の時なり」

又云く「正像稍過ぎ已つて末法太だ近きに有り法華一乘の機・今正しく是れ其の時なり何を以て知る事を得

ん安樂行品に云く末世法滅の時なり」(以上は曾谷入道等許御書一〇三七頁・一〇三八頁)

天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」(撰時抄二五九頁)

妙樂大師云く「末法の初め冥利無きにあらず」(撰時抄二六〇頁)

以上のごとく釈尊をはじめとした多くの予言に対して日蓮大聖人は、次のごとく仰せられて五五百歳に広宣流布實現を確信されている。

撰時抄（二六〇頁） 彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華經と唱うる癡人とはなるべし。

諸法実相抄（一三六〇頁） 末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり、日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是めに地涌の義に非ずや、剩へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華經と唱へん事は大地を的とするなるべし。

以上の御文にみるように、広宣流布のご確信を述べられ、最後に本門戒壇の建立を、第二祖日興上人に遺付せられたのである。

さらに日蓮大聖人は末法に必ず広宣流布すべきのみならず、日本より起こる日蓮大聖人の仏法が、中国・インドにまで流布すべき確信を、次のごとく述べられている。

聖人知三世事（九七四頁） 教主釈尊既に近くは去つて後三月の涅槃之を知り遠くは後五百歳・広宣流布疑い無き者か。

顕仏未来記（五〇七頁） 此の人は守護の力を得て本門の本尊・妙法蓮華經の五字を以て閻浮提に広宣流布せしめんか……遵式の云く「始西より伝う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の昇るが如し」等云云、……仏記に順じて之を勘うるに既に後五百歳の始に相当れり仏法必ず東土の日本より出づべきなり。

諫曉八幡抄（五八八頁） 天竺国をば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国をば日本国と申すに聖人出で給わざらむ、月は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相なり、日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり。

【舎衛しゃえの三億さんおく】

仏法の聞きがたいことをいう。仏の在世に生まれ合わせてさえも、なお仏を見ず、仏について聞かない者が多いことを、舎衛国の実例によって示したもの。次に舎衛と三億とに分けて解説する。

舎衛——本来、憍薩羅国の都城の名。国号としてもつかわれる。つぶさには、室羅筏悉底しらばつしつていという。舎衛はその訛略かりやく。ほかに舎婆提しゃばだい、尸羅跋提しりばつだい、捨羅婆悉帝夜等しやらばしつていやの名もある。釈迦はこの国の迦比羅衛城かひらえに生まれた。大智度論卷三に「舎婆提城には九億の家あり、是の中に若し少時のみ住したまわば、多人を度することを得ず。是れを以つての故に、多く住したまえり」とあるごとく、仏はここに止住すること二十五年、国王・波斯匿はしおく、大臣・須達多すだたをはじめ多数の民衆を教化した。しかし、かかる恵まれた環境かんぎようにありながら、舎衛国において釈迦の教えを眼まのあたり聞いた家は、全体の三分の一にすぎなかった。三分の一は、仏のいることを耳にはしたが、見たことはなく、また三分の一は、見たことはおろか聞いたこともなかったという。大智度論卷九に「仏は此の重罪にして見仏の善根を植えざる人のために説いていわく、仏世には値あい難がたし。優曇波羅樹うどんはらじゆの華の、時一たび有るがごとしと。説くが如くんば、舎衛の中に九億の家あり。三億の家は眼に仏を見、三億の家は耳に仏有りと聞くも、しかし眼に見ず。三億の家は聞かず見ずと。仏、舎衛に在すこと二十五年、しかも此の衆生は聞かず見ず、何に況いはんや遠き者をや」とある。また止観卷四の上には「世に仏有りて法を説き人を度すと雖も、しかもそれ等においてまったく利益なし。たとい値遇ちぐうすることをうるも、開解すること能あたわず、振丹しんたんの

一国覺らず知らず、舍衛の三億聞かず見ず、諸天に著樂し、および難処に生じて、来たり聴受せず」とある。
三億——大論、止觀の文により、舍衛の三億とは、九億の家の三分の一、すなわち仏を眼のあたり見ない者三億、またはまったく聞いたことのないもの三億をさすことは明らかである。古代インドにおいては、今日の十萬を億と名づけた。

したがって、舍衛の三億は三十萬であり、舍衛全体では九十萬戸があつたと推定される。しかし、釈迦在世に盛んだつた國勢も、滅後は次第に衰退し、ついに滅びて十九世紀中葉までは、その古址も判然としない状態であつた。

【一念三千】

一念三千は仏教の極理である。釈尊はこれを本懷として法華經迹門方便品にいたり「諸法実相」に約して、ほぼこれを説いた。ついで本門壽量品にいたり「因果國の三妙」に約して仏身の振舞いのうえからこれを説いた。これを受けて天台大師は像法時代に出現して、摩訶止觀の第五で次のように説いたのである。

觀心本尊抄（二三八頁） 摩訶止觀第五に云く世間と如是と一なり開合の異なり。「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、此の三千・一念の心に在り若し心無んば而已やみなんけに介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に稱して不可思議境と為す意此に在り」さて、十界とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・緣覺・菩薩・仏である。十如とは如是相・性・体・

力・作・因・縁・果・報・本末究竟等である。三世間とは五陰と衆生と国土の世間である。

五陰とは色・受・想・行・識の五であり、陰とは「おおいかくす」の意と「あつまる」の二つの意味がある。「おおいかくす」の意で九界に約せば善法をおおいかくしており、仏界に約せば慈悲におおわれていることになる。「あつまる」の意味で九界に約せば生死のあつまりであり、仏界に約せば常樂があつまっていることになる。

五陰が仮に和合するのを衆生という。十界にはそれぞれの衆生があり、仏界は尊極の衆生である。

国土世間とは十界の住する所である。仏は寂光土、菩薩は実報土、二乗は方便土、天は宮殿、人は大地、地獄は赤鉄に住する等のごときである。

世間とは差別の義である。Aの人とBの人を比べて五陰の差別を五陰世間という。仏界の衆生と人界の衆生の差別を衆生世間という。同様に国土の差別を国土世間という。（十界互具、十如是、三世間の項参照）

ところで、一念三千には事と理があり、迹門は理の一念三千であり、本門は事の一念三千である。与えて論ずれば迹門を理の一念三千と名づけるが、奪っていえば迹門を真実の一念三千ということはできない。

観心本尊抄（二五三） 像法の中末に観音・藥王・南岳・天台等と示現し出現して迹門を以て面と為し本門を以て裏と為して百界千如・一念三千其の義を尽せり、但理具を論じて事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊未だ広く之を行ぜず所詮円機有って円時無き故なり。

開目抄上（一九七） 迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顯本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を

見るがごとし・根なし草の波の上に浮べるに^似たり。

本迹の一念三千に以上のような相違があるとはいへ、文底下種本門に対するとき、法華經の本迹二門ともに理の一念三千となる。すなわち一念三千の法門とは、寿量品の文底に秘し沈められた三大秘法の南無妙法蓮華經である。

開目抄上（一八九六） 一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知ってしかも・いまだ・ひろ^拾い^出ださず但我が天台智者のみこれをい^懐だけり。

本因妙抄（八七七六） 問うて云く寿量品・文底の大事と云う秘法如何、答えて云く唯密の正法なり秘す可し秘す可し一代応仏のいきをひかえたる方は理の上の法相なれば一部共に理の一念三千迹の上の本門寿量ぞと得意せしむる事を脱益の文の上と申すなり、文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観・事行の一念三千の南無妙法蓮華經是なり。

【事^じと理^り】

諸法の実相は事と理に分けられる。事とは宇宙の森羅万象^{しんらばんしやう}の事実の姿をいい、その姿のなかにある法則^{ほうそく}が理である。ゆえに生命を論ずる場合は必ず事理の二面から論じなければならぬ。

釈尊の時代には、宇宙の具体的事相、また世間の具体的人間の姿を通して、絶対にくずれない生命の実相を悟^{さと}るために、具体的修行を説いた。六波羅蜜行^{はつみつぎやう}もその修行のなかの一つである。そしてこの修行を事といい、

この修行を通じて、生命の実相の理を悟ろうとした。ゆえに釈迦仏法においては、事より理が勝れているのである。そして法華經に一念三千の法理を説き明かしたのである。

しかし末法にはいると事と理の内容は変わるのである。すなわち、日蓮大聖人は一念三千の理を、凡身のわれわれに悟らせるために、具体的にどうすべきかを考えになり、宇宙の生命、すなわち、一念三千の法理の当体として一幅の大曼荼羅まんだらをご図頭ずどうになられたのである。ゆえにこの大曼荼羅には、一念三千の理を含むゆえに事は理より勝れていることになる。そしてこの曼荼羅を信受し唱題することにより、一念三千の当体をわが凡身に湧現ゆげんできるのである。実に甚深じんじんの法門なのである。

草木成仏口決（一三三九） 一念三千の法門をふりす振濯ぎたてたるは大曼荼羅まんだらなり、当世の習いそこないの学者ゆめにもしらざる法門なり。

【十界互具じっかいごぐ】

十界互具とは地獄より仏界にいたる十界のおのおのに十界を具していることである。

観心本尊抄（二四〇） 法華經第一方便品に云く「衆生をして仏知見ぶつちけんを開かしめんと欲す」等云云是は九界所具の仏界なり、寿量品に云く「是くの如く我成仏してより已来このかたはなほだ甚大に久遠なり寿命じゆみよう・無量阿僧祇劫むりようあそうぎこう・常住じようじゆうにして滅せず諸の善男子・我本菩薩もとの道を行じて成ぜし所の寿命今猶未だ尽きず復上の数に倍せり」等云云此の經文は仏界所具の九界なり、經に云く「提婆達多だいばだつた乃至天王如来」等云云地獄界所具の仏界なり、

經に云く「一を藍婆^{らんば}と名け乃至汝等但能く法華の名を護持する者は福量るべからず」等云云、是れ餓鬼界^{がき}所具の十界なり―以下略―

右の御文中で、法華經方便品の文は、凡^{ぼんげ}下の衆生にも仏の知見がそなわっていることを示している。もし凡夫に仏の知見が、まったくないならば、開くところの何ものもないことになるのである。次の寿量品の文は、仏界に九界を具足しているとの御文である。菩薩の道を行じたということが、なぜ仏界所具の九界となるか。それは菩薩道を九界の代表としてあげ、無数の河川が流れて海へはいると、同じく一つの海水となるが、しかもそのなかに河川の水をそのまま含むように、九界の所行はそのまま仏界の徳に具足していることを示すのである。次の「提婆達多^{だいばだつた}乃至天王如来」の文は地獄界に仏界を具している。いわんや余の八界を具していることはいうまでもないとの意である。次いで「餓鬼界所具の十界」以下はこれに準じて知るべきである。

さて末法における真実事行の十界互具については、次のようなご教示がある。

本尊七箇の相承（富要一卷三一） 真実の十界互具は如何、師の曰く唱えられ給う処の七字は仏界なり、唱え奉る我等衆生は九界なり、是れ即ち四教の因果を打ち破って真の十界^{じゅうかい}の因果を説き顕わす、此の時の我等は無作三身^{むささんじん}にして寂光土に住する実仏なり、出世の応仏は垂迹施権^{すいじやくせけん}の権仏^{ごんぶつ}なり秘す可し秘す可し。

当体義抄文段（富要四卷三九五） 蓮祖は是れ本果妙の仏界なり、興師は是れ本因妙の九界なり、富士山は即是れ本国土妙なり、若し爾らば種が家の本因・本果・本国土・三妙合論の事の一念三千にして、即是れ中央の本門の本尊なり。

このように明らかにお示しのように、われわれ凡夫の一念に大御本尊を信じ奉る瞬間に仏界を具し、御本仏

日蓮大聖人のご一念も他の九界を具足していることが真実の十界互具である。種が家の本因・本果とは、日蓮大聖人が本果妙の仏界に居し、血脈付法の大導師・日興上人が本因妙九界の代表となられるのである。次の御文のごときも一往は在世脱益の儀式に通じるといえども、再往の実義は末法下種が家の本因本果・真実の十界互具と拝すべきである。

開目抄上（一九七頁） 本門にいたりて始成正覺をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打ちやぶって本門の十界の因果をとき顯す、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も無始の九界に備りて・真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

【十如是一】

方便品において「唯、仏と仏と、乃し能く究尽し給える諸法の実相」として説かれたのが「如是相・如是性・如是体・如是力・如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等」の十如一である。その意はわれわれの精神も肉体も、もちろんのこと、宇宙のあらゆる森羅万象は、ことごとくそれぞれの外に現われていゝる相貌があり、また性質性分があり、そのものの実体があり、したがってそれのおよぼす力を内在して、發動しては作用となり、変化を起こす原因と、因を助けて変化させる縁とが合致して結果を生む。その報はそのまま相であり、したがって相性体力作因縁果報をそなえて、すなわち本末究竟して等しと説くのが十如実相である。これは略開三顯一の文であり、天台はこれによって理の一念三千を立てたのである。

観心本尊抄（二三九頁） 釈籤第六に云く「相は唯色に在り性は唯心に在り体・力・作・縁は義色心を兼ね因果は唯心・報は唯色に在り」等云云、金錚論に云く「乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵・各一仏性・各一因果あり縁了を具足す」等云云。

三重秘伝抄（富要三卷一八頁） 止観の第五卷に至りて正しく一念三千を明すなり、此れに二意あり、一は如是に約して數量を明す所謂百界・三百世間・三千如是なり、二に世間に約して數量を明す所謂百界・千如是・三千世間なり、開合異ると雖も同じく一念三千なり云云。

以上の文におけるように、一念三千の法門の最初は十界互具より始まる。この十界互具は爾前經にはいまだ説かれていないのである。ゆえに日蓮大聖人は次のごとく仰せである。

開目抄上（一八九頁） 一念三千は十界互具よりことはじまれり、法相と三論とは八界を立てて十界をしらず況や互具をしるべしや、俱舍・成実・律宗等は阿含經によれり六界を明めて四界をしらず。

すなわち、法華經迹門にいたり、二乗作仏を説き、九界即仏界の義を明かし、十界互具を説き明かすのである。したがって、十界の各界にそれぞれ十界を具すから百界となるのである。

さらに、方便品で「唯、仏と仏と、乃し能く諸法の実相を究尽したまえり。所謂諸法の如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり」と十如是を説くことにより、百界は千如となる。この迹門の一念三千を、理の一念三千というのである。次いで釈尊は、本門を説き、壽量品にいたって始成正覺を打ち破って久遠実成を説く、そして三妙合論に約して一念三千を明かすゆえ、本門の一念三千を、事の一念三千というのである。また、迹門は、百界千如であるが、本門は、国土世間が説か

れるところからも三千になるのである。このことは、観心本尊抄（二四九頁）に「十界久遠の上に国土世間既に顕われ一念三千殆んど竹膜ちくまくを隔へだつ」とある御文に明らかである。

しかし、本門を事の一念三千というも、末法の法華経たる、日蓮大聖人の三大秘法の南無妙法蓮華経よりみるならば迹本ともに理の一念三千となり、文底独一本門を事の一念三千の法門というのである。かかるゆえに「一念三千殆んど竹膜を隔つ」というのである。このように十如是の文こそ、一念三千の出発となる重要な文であり、また迹門の仏は、これにすべてを尽くしているのである。

しかし、十章抄（一二七四頁）に「一念三千の出処は略開三の十如実相なれども義分は本門に限る」とあるように、迹門は文のみであり、その義は本門である。しかも、久遠元初の文底下種の法門にいたって、初めて真実の事の一念三千となるのである。したがって日蓮大聖人の仏法において、初めて真に生命の本質を説き明かされたといえるのである。

次に、十如是の一つ一つについて説明を加えてみることにする。

如是相とは、外面の姿であり、物質・肉体である。如是性とは内面の性質であり、精神・心・智慧等ちゑをいうのである。如是体とは、生命である。如是力とは内在している力。如是作とはその力が働き出すことをいうのである。その働きはまたその生命自体にとっては何らかの因となる、これを如是因じゆいんというのである。因は外界の助縁じよえんと和合して果を生む、これが如是縁、如是果である。さらに果に何らかの報ほういを感じるのが如是報である。初めの如是相を本として終わりの報を末として本末は究竟くきやうして等しい、これを如是本末究竟等というのである。

以上、一般論的に十如是を説明したが、さらに、日寛上人、戸田前会長の教えより、十如是を詳しく説明した文をあげてみることにする。

三重秘伝抄（富要三卷一七頁）にいわく、

如是相とは譬^{たと}えば臨終^{りんじゆう}に黒色なるは地獄の相・白色なるは天上の相等の如し、如是性とは十界の善惡の性・其の内心に定まり後世まで改まらざるを性と云うなり、如是体とは十界の身体色質なり、如是力とは十界各各の作^なすべき所の功能なり、如是作とは三業を運動し善惡の所作を行うなり、善惡に亘^{わた}りて習因習果あり、先念は習因・後念は習果なり、是れ即ち惡念は惡を起し善念は善を起す、後に起す所の善惡の念は前の善惡の念に由る故に前念は習因・即ち如是因なり、後念は習果・即ち如是果なり、善惡の業体を潤^{じゆん}ずる助縁は是れ如是縁なり、習因習果等の業因に酬^{むく}いて正しく善惡の報を受くるは是れ如是報なり、初めの相を本となし、後の報を末と爲し、此の本末の其の体究^{きわま}つて中道実相なるを本末究竟等と云うなり云云。

ここで戸田前会長が九界に約して十如是を解説した文をあげてみよう。

たとえば、ある人が十萬円の札束を拾^{ひろ}ったとする。その瞬間^{しゆんかん}に次のような働きがある。しかし、この例は生命活動の一瞬間の働きであるということ忘れてはならない。

如是相 拾った瞬間のその人の姿、かたちである。金が欲^ほしくてたまらない餓鬼^{がき}の境涯にいる人は、うれしさのため、何もかも忘れ、相好^{そうこう}をくずし、夢中で喜んでゐる姿になる。地獄界の人、たとえば、一人の子が病気で死にそうな状態に悩んでいる父親が、この十萬円を拾った瞬間は、札束を拾ったのか、くず紙の束を拾ったのか、わからぬような姿で、また捨てようとするような態度であるかもしれぬ。また声聞界、縁覺界の人は、

自分だけは幸福でも、他人のことなどは、少しも考えぬ境涯きやうがいの人であるから、この十萬円の束を拾ったとするならば、掛かかり合いになつてはならない、めんどろなことが起こつてはならないと思ひ、これを捨てて逃げようとする姿を示すであらう。このような、十萬円を拾ったときの喜びの姿、驚きの姿、迷惑めいわくそうな姿、氣の毒そんな姿等が如是相である。

如是性 その時の心の動きであり、畜生界の人は、拾った姿を人に見られたくないと思ふであらうし、人間界の人は、拾った物は交番に届けるのが当然だという、一般通念にもとづいてゐる心の状態であらう。また菩薩界の人は、落とした人がかわいそうだ、早く届けてやりたいという心で、いっばいではなからうか。

如是体 修羅界しゆらの人は腹を立て、その場に投げようとする姿が、体があらわれるだらう。餓鬼界がきの人は、十萬円の束をしっかりとにぎりしめて、落としてはならないという餓鬼の姿を示すであらう。このように、その人の性分とその人の姿に、種々の体をなすのである。すなわち、驚いた体、喜んだ体、当惑とうわくした体、人に見られはしないかと、あたりを見回そうとする生命体などがあるであらう。

如是力 畜生界の人は、ノラ犬が食べ物をかくれて食べるときのような力が出る。地獄界の人は、十萬円の金をもったときも、なんの力も湧わいてはこないだらう。菩薩界の人は、落とした人に一刻も早く届けてやりたい心で、いっばいであるから、その方法等について、勇氣凜然りんぜんたる力が湧いてくるはずである。

如是作 前の力が働きとなつて現われ、声聞・縁覺の人は、自分に迷惑がかからないようにしようという一心であるから、そつとそこに置おこうとする働きが満ちる。畜生界の人は、十萬円の金をわがものにしようとする意図が満ちて、鼠ねずみが穀物こくもつをとろうとする働き、犬が食物を盗みとらんとする働きが、そこに現われるである。

う。このように、拾った十万円を持っている、その人の瞬間しゅんかんには、十万円をどうすべきかという働きを保っているのである。

如是因　その十万円を拾ったということが何かの因になる。すなわち世の中をおもしろく愉快ゆかいに暮くらしている天界の人は、拾ったことが愉快で、また天界の因となる。菩薩界の人は、拾った十万円で人を救い、菩薩行の因を積むであろう。地獄界の人は、十万円拾っても、あいかわらず悩みに沈んでいるだけであるから、地獄の因を積んでいるにすぎない。これでは、幸福への道は開けないのである。また拾ったという、その瞬間に十万円を拾うべき因もあるのである。

如是縁　地獄界の人は拾った十万円が、また外界の縁となり、そこにさらに悩みが起るような縁になって苦悩を深める。人をあわれみ、世を思う徳高い菩薩界の人は、この十万円と結んだ瞬間の縁は、落とした人をあわれむの心から、あわれみ深い人が、けがをした人と会ったような縁と似ているであろう。声聞・縁覚界の人は、オレ一人よければ、それでよいという個人主義の人だから、十万円を拾った瞬間に、その縁はあたかも、貴婦人がゲジゲジにあったような縁に似たものではなからうか。

如是果　人間界の心平らかな人は、十万円をもったということに対して責任を感じずるような心になる果があるであろう。すなわち十万円拾った瞬間の心の状態が果である。

如是報　個人主義的な声聞・縁覚界の人にとって、その十万円は不愉快ふゆかいをおぼえる一個の物にすぎず、餓鬼界の人は一割の謝礼金しやれいきんを考えるだろうし、天界の人は、拾った人もうれしく、落とした人もおもしろいといっている人であるから、十万円の金は、よいおもちゃであるくらいの報をうけているのであろう。

如是本末究竟等 如是相を始め（本）とし、如是報を終わり（末）として、本末究竟して中道法相である。

畜生界の人は如是相から如是報にいたるまで、一貫して十万円に執着しきっている姿で、相性体力作因縁果報まで、究竟して等しく、この状態以外の何ものもない。修羅界の人も、如是相から如是報にいたるまで、一貫して腹を立てきっている状態で、相性体力作因縁果報みな究竟してこの姿である。声聞・縁覚界の人は、如是相から如是報にいたるまで一貫して、みな関係したくないという個人主義的状态で、相性体力作因縁果報まで究竟して等しくこの姿である。菩薩界の人は、如是相から如是報にいたるまで、一貫して思いやり深い状態で、相性体力作因縁果報まで等しく同じである。

以上の説明のように、十如是は、九界おのおのについていえる。次に仏界に約して十如是を説明してみることにする。しかし、仏界は現じ難いものであるがゆえに、われわれ凡愚には、なかなか理解しがたいことである。ゆえに前章と同じく、戸田前会長の講義のなかより、仏界に約して説明された文をあげてみよう。

如是相 仏にもお姿がある。迹門の仏と、本門の仏と、文底秘沈の仏とは、みな相が違います。ピカピカしたアミダみたいな仏相、あんなのは考えてみたって、ウソだということがわかるでしょう。そんなウソのものを信じて、たよりにしても、しようがないのです。ところが、末法の御本尊、文底秘沈の御本尊の如是相というのは、凡夫のお姿そのままではないか、凡夫相でいらせられる。それが本当のお姿である。

如是性 仏の性分を持っていच्छる。日蓮大聖人は、お姿は凡夫のお姿であるが、お心は御本仏の性分である。

如是体 そして、日蓮大聖人という御本体を作られている。これは、御本尊についても同じくいえる。

如是力 力を持っておられる。同じ仏でも、迹門の仏と、本門の仏と、文底秘沈の仏とは、力が違う。文底秘沈、南無妙法蓮華經という力は、日蓮大聖人というお力は、あらゆる仏を作られている。

如是作 力あるところ、必ず作用がある。

如是因 作用があるのには、原因がある。日蓮大聖人が末法にお生まれになって、文底秘沈の大法を説かれる因は、久遠元初に、すでにできているのである。

如是縁 その縁は、末法の衆生というものを縁になさっていらっしゃる。われわれが縁になっているのである。われわれは、釈尊になんにも縁がない。だから、釈尊の仏法なんかでは絶対に成仏できない、幸福にならない。そういうしまつの悪い者が生まれてきた時だから、それを縁としてご出現になったのである。

如是果 よって、竜の口のご難を受けられ、仏の境涯をあらわされた。

如是報 報いを受けられた。御本仏としてのひじょうに平らかな境涯を九か年、身延の山でおすごしあそばして、仏の境涯を楽しまれたのが報です。

如是本末究竟等 これを仏の姿に読みますれば、如是相という日蓮大聖人のお姿、如是性という本仏のお心、また、如是体という本体にしても、力にしても作用にしても、因縁果報ことごとく御本仏の姿それ自体でしょう。本も末も、究竟して等しいでしょう。御本尊と申し上げますれば、如是相も、如是性も、如是体も、力作因縁果報ことごとく御本尊なのである。一貫していなければダメなのである。

以上、仏界の十如が明らかであるように、この諸法実相の文は、実に、大御本尊のお姿をお説きになった文なのである。

【三身】さんしん

法身ほうしん、報身ほうしん、応身おうしんを三身という。宇宙のすべての生命、またわれわれの生命にも三身を具している。応身とは肉体（外界にあらわれた色形）、報身は智慧（内面に備わっている力）、法身は生命（本来永遠の實在）である。爾前にぜんの経教においては、種々の仏が説かれるが、いずれも娑婆世界しやばでなく他土に住し、始成の仏である。しかもただ法身のみであったり、報身のみであったり、あるいは応身仏である。これに対し、寿量品において「久遠本有常住・此土有縁深厚」の三身具足の釈迦如来が説かれて、生命の実相が説き示されるのである。寿量品の目的は報中論三ほうちゅうろんさんといつて、報身を要かなめとして総体の三身を説くのである。しかして文底の意は、久遠元初の自受用無作三身じじゆうむささんしんを示していることであり、御義口伝等によって明らかである。

四条金吾釈迦仏供養事（一一四四頁）三身とは一には法身如来・二には報身如来・三には応身如来なり、此の三身如来をば一切の諸仏必ずあひぐす譬へば月の体は法身・月の光は報身・月の影は応身にたとふ、一月に三のことわりあり・一仏に三身の徳まします……天台大師の云く「仏三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」云云。

三大秘法稟承事（一〇二二頁）寿量品に云く「如来秘密神通之力」等云云、疏じよの九に云く「一身即三身なるを名けて秘と為し三身即一身なるを名けて密と為す又昔より説かざる所を名けて秘と為し唯仏のみ自ら知るを名けて密と為す仏三世に於て等しく三身有り諸教の中に於て之を秘して伝えず」等云云。

開目抄上（一九八頁） 雙林最後の^{そりん}大般涅槃經・四十卷・其の外の法華・前後の諸大經に一字一句もなく法身の無始・無終はとけども応身・報身の顯本はとかれず。

法華真言勝劣事（一二五頁） 今大日經並に諸大乘經の無始無終は法身の無始無終なり三身の無始無終に非ず。

御義口伝下（七五二頁） 如来とは……別しては本地無作の三身なり……無作の三身とは末法の法華經の行者なり。

さて、三身常住について論ずるならば、爾前^{にぜん}においては、あるいは応身を説き、あるいは報身を説き、あるいは法身を説くといえども、いずれも単法身^{たんぽうしん}等であり、いまだ三身即一ではなかった。

法華經迹門にきても応即法身の分野で、いまだ自受用身ではない。本門にいたり、初めて^{おうぶつしょうしん}応仏昇進の自受用身ではあるが、長寿^{ちやうじゆ}を明かして自受用報身とあらわれたのである。ここにおいて、爾前各別の三身が整足^{せいそく}されて、一身即三身、三身即一身であることが明らかとなり、すなわち、報中論三といわれるゆえんである。しかし、これも本果第一番、五百塵点劫^{じんてんごう}における垂迹化他第一番成道の仏身であるから、いまだ常住の体そのものではなく、本有無作の三身、久遠元初の自受用報身如来のご出現がなければ、常住の体は明らかとはならないのである。

さて、爾前の三身はバラバラであるから、始成の仏身であり、かつ滅度の仏となる。迹門にきたって、初めて十如実相が説かれ、相性体が体の三身であり、力作因縁等の七如是^{ゆう}が用の三身であることを示して、三身即一の実相が示され、寿量開顯への理がまず示される。ここにおいて、十界互具し法界の実相は十如を出でず、

相性体の三諦が仏の実体であることが明らかになった。

後、寿量品において長寿を明かされ、能化の円仏も所化の大衆も、みな等しく永遠であると示されて、この三身は常住のものなりと決定したのである。もちろん、国土世間も同様、永遠と決まったのである。

「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり」との観心本尊抄（二四七頁）の御文のとおりである。

「此の三如是の本覚の如来は十方法界を身体と為し十方法界を心性と為し十方法界を相好と為す是の故に我が身は本覚三身如来の身体なり……然るに此の金剛不壊の身を以て生滅無常の身なりと思う僻思は譬えば莊周が夢の蝶の如しと釈し給えるなり」と三世諸仏總勘文教相廃立（五六二、五六七頁）にお示しである。

裏返していえば、この三諦をわが身の外とと思っているのが九界の迷いであり、十方法界の相性体はわが身の上のことであると知れば悟りであり、ここに大御本尊を拝した悟り、本有無作の三身があるのである。「法界の五大は我が五大」との御文も同意である。法界は常住なるゆえに、法界の相性体そのものである無作三身も常住である。詳しくは三世諸仏總勘文教相廃立にお示しである。

四土四教の仏は、土も仏も総の三諦の鏡に映った影にすぎない。ただ、この総の三諦の円仏のみが常住の真仏であり、ゆえに「上上品の寂光の往生を遂げ須臾の間に九界生死の夢の中に還り来って身を十方法界の国土に遍じ心を一切有情の身中に入れて内よりは勧発し外よりは引導し内外相応し因縁和合して自在神通の慈悲の力を施し広く衆生を利益すること滞り有る可からず」（三世諸仏總勘文教相廃立五七四頁）と教示されているのである。

【因果俱時】

因果とは、原因・結果であって「因果俱時」と「因果異時」の二つの場合がある。因果俱時とは本質論であり、因果異時とは現象面をとらえた見方である。

春蒔いた種が原因となって、その結果、夏に花が咲くとするような場合は、因果異時である。

因果俱時とは瞬間の生命に因と果をそなえていることである。卑近な例でいえば指先に火がふれて「あつい！」と感ずる。火が触れるのは因で熱いと感ずるのは果であるが、それは一瞬の因果である。また怒ると人相が変わる。怒るは因で人相が変わるのは果であるが、これも一瞬の因果である。

その他、結果の現われるまでに時間を要するような場合であっても、その本質をたずねれば、一瞬の生命にあらゆる幸・不幸等の因果を同時にそなえているのである。この「因果俱時不思議の一法」を妙法蓮華と名づけるのである。仏法のうえから論ずれば、これにも、また次のような二つの場合がある。

一には九界を因とし仏界を果とする場合である。あらゆる生命は十界をそなえており、九界即仏界、仏界即九界と因果俱時・十界宛然と一念の心法に互具していることを「因果俱時不思議の一法」というのである。

二には十界各具の因果である。地獄界のごときは瞋いかって悪口をいう、瞋るは因で、悪口をいうは果であり、しかも一刹那せうなにこのような悪の境智きょうち和合がある。仏界のごときは御本尊を信じて題目を唱える。信心は因で唱題は果であり、しかも一念の刹那せうなにこの因果を具す。これを妙法蓮華と名づけるのである。

この一瞬の因果を開くならば、

開目抄下（二三一頁） 天台云く「今我が疾苦は皆過去に由る今生の修福は報・将来に在り」等云云、心地観經に曰く「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」等云云。

すなわち、過去のあらゆる因が現在の果であり、現在の一瞬一瞬の生活はすべて因となって未来の果を結ぶ。信心修行の一日たりとも怠^{おこた}つてならない理由はここにあるのである。

【三 さん 宝 ほう】

三宝とは仏法僧のことで、別名を三尊ともいう。仏宝とはいふまでもなく、宇宙の実相を見きわめられ、主師親の三徳をそなえられた仏であり、法宝とは仏の説いた教法、僧宝とはその法を学び伝持していく方をいうのである。

三宝の立て方は、正法、像法、末法、それぞれ、その時代により異なる。釈尊の法華經による三宝は、仏宝Ⅱ釈尊、法宝Ⅱ法華經二十八品、僧宝Ⅱ上行菩薩であり、末法の三宝は、唯授一人の相承^{そうじょう}を、清純に伝承^{でんじょう}している日蓮正宗のみが知る深秘^{じんび}の法門である。すなわち仏宝は、久遠元初の自受用報身如来であられる日蓮大聖人、法宝は事の一念三千・南無妙法蓮華經の大御本尊、僧宝とは血脈付法の御弟子日興上人である。

身延派をはじめとする邪宗日蓮宗は、釈迦多宝の二仏を仏宝とし、南無妙法蓮華經の主題の五字を法宝と

し、日蓮大聖人を僧宝と立てているが、これは大なる僻見びやくけんである。なぜならば、仏法僧はその内容において、一体不二でなければならないのに、すでに仏宝と法宝とに勝劣むじゆんの矛盾があり、日蓮大聖人を僧宝とする等は、日蓮大聖人こそ下種の御本仏たることを知らぬ証あかしである。

諸法実相抄（一三五八頁）　されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華經こそ本仏にては御座おわ候へ。

撰時抄（二八四頁）　日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし、これをもってすいせよ漢土月支にも一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず。

百六箇抄（八六三頁）　下種の法華經教主の本迹。自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり。

以上の御文から、末法の仏宝は、日蓮大聖人であることは明白である。

【種しゆ 熟じゆく 脱だつ】

種とは下種のこと、仏にあって、仏になる種を得ることであり、熟とは過去の下種が薰発くんぱつし、調養じようようすること、脱とは下種された仏種が調養して、ついに仏と同じ境涯を得るにいたる、すなわち成仏することをいう。秋元御書（一〇七二頁）　種熟脱の法門・法華經の肝心なり、三世十方の仏は必ず妙法蓮華經の五字を種として仏になり給へり。

觀心本尊抄（二四九頁） 設い法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還つて灰断に同じ化の始終無しとは是なり。

以上のように種熟脱の法門は仏法を論ずるにあたつて肝要である。日蓮大聖人は「法華經は種の如く仏はうへての如く衆生は田の如くなり」（曾谷殿御返事一〇五六頁）と仰せられている。すなわち下種し熟し脱する過程が明らかにされたのは、法華經の迹門化城喻品において、大通下種三千塵点劫の法門が最初である。すなわち大通智勝仏の時に下種をうけて、それがしだいに熟して釈尊にあい、さらに未来不可思議劫を経て成仏すると説くから、これを熟益仏法という。次いで本門寿量品においては五百塵点劫以来の種熟脱が明らかにされて師弟の遠近が説き示されている。

これを要するに釈迦仏法においては五百塵点劫に下種し、大通仏および爾前四十余年・法華經の迹門までを熟益となして、本門寿量品にいたつて脱せしめるのが文上至極の義である。ゆえに脱益仏法という。

しかるに末法においては本未有善の衆生であるから寿量文上の脱益の仏法はまったく利益がなく、文底下種仏法のみが真に末法の衆生を救う利益があるのである。日蓮大聖人の文底下種仏法は、下種益といい、妙法五字の下種をうけ、直達正觀して、ただちに仏の境涯を得るのであつて、末法においては、この下種益の御本尊によつてのみ成仏することができるのである。ゆえに觀心本尊抄（二四九頁）には「彼は脱此れは種なり」と仰せられ、御義口伝下（七五三頁）には「当品（寿量品）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す」と仰せられている。

【五重玄】

五重玄とは天台大師が法華經を解釈するにあたって、法華玄義に説いた名・体・宗・用・教で、詳しくは、釈名・弁体・明宗・論用・判教のことである。

これを平易に説明すれば、名は万物の名前であり、体は万物の当体であり、宗は万物おのおのがそなえている特質であり、用はその働き作用であり、教はその活動が影響するをいう。

すなわち万物ことごとくこの五重玄をそなえている。天台大師は、法華經神力品の結要付嘱の文を、この五重玄の依文としているが、この文はまた、日蓮大聖人が末法で建立の三大秘法の依文でもある。すなわち「要を以て之を言ば如来の一切の所有の法（名）如来の一切の自在の神力（用・戒壇）如来の一切の秘要の藏（体・本尊）如来の一切の甚深の事（宗・題目）皆此經に於て宣示顯説す」と。教は名体宗用のあるところ、必ずそなわっているのである。また三大秘法の大御本尊は、次のようであると御書にお示しになっている。

当体義抄（五一三） 聖人理を觀じて万物に名を付くる時・因果俱時・不思議の一法之れ有り之を名けて妙法蓮華と為す（已上は名玄義）此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し（已上は体玄義）之を修行する者は仏因・仏果・同時に之を得るなり（已上は宗玄義）、聖人此の法を師と為して修行覚道し給えば妙因・妙果・俱時に感得し給う（已上は用玄義）。

これを、わかりやすく、説明するならば、名玄義は、妙法蓮華經の御本尊の名前であり、体とは、十界・十

如・三千の諸法、すなわち一念三千の当体の御本尊のことである。宗とはこの御本尊を信じて題目を唱えるとき、仏因・仏果を同時に感得する、受持即觀心の特質をいう。また一切衆生を、仏因・仏果・俱時感得（即身成仏）して救いきる力を用とするのである。

【三因仏性】

仏性には三因仏性があることが説かれているが、三因仏性とは、正因仏性、了因仏性、縁因仏性の三つである。大涅槃經邪正品にいわく「一切衆生仏性ありと雖も、かならず持戒に因りて、然して後乃ち見る、仏性を見るに因りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得」と。

「一切衆生仏性あり」ということは、正因仏性である。正法を信じていない人でも、理の一念三千の当体であり、仏性を存しているのである。ゆえに、御本尊に題目を唱えることによって、仏性が開發するのであって、ここに「一切衆生仏性あり」ということができる。

次に「持戒に因りて、然して後乃ち見る」の「持戒」とは、すなわち縁因仏性である。「持戒」すなわち、御本尊を持つことによって、仏性を開發することができる。

次には「仏性を見るに因りて阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得」の「仏性を見る」とは、すなわち了因仏性である。

天台大師の金光明經玄義にいわく「云何なるか三仏性なる、仏とは名づけて覺となす、性とは不改に名づ

く、不改は是れ常に非ず、無常に非ず、土の内に金の蔵せるが如し、天魔外道も壞ること能わざるを、正因仏性と名づく、了因仏性とは、覺智は常に非ず、無常に非ず、智、理と相応し、人の能く金の蔵せるを知るが如く、此の智破壊すべからざるを了因仏性と名づく。緣因仏性とは、一切の常に非ず、無常に非ざる功德善根覺智を資助し、正性を開顯す、草穢を耘り除いて、金の蔵せるを掘出するが如きを、緣因仏性と名づく、当に知るべし、三仏性皆常樂我淨にして、三徳と無二無別なり、すでに金光明の三字を見て三徳に譬うるなり」以上、三因仏性について、土中の金をもって説明しているのである。すなわち、土中の金は、いまだ誰にも發見されないとこの金であつて、發見はされないが、一切衆生ことごとく仏性を存す、すなわち、金を蔵しているのである。これ正因仏性というのである。人が土中に金の蔵することを知るとは、その人の智慧によるのである。すなわち、御本尊に縁をもつことによって、仏性が開發される、これが緣因仏性である。そして仏性を了知することができるのである。これ了因仏性なのである。

四明知礼の拾遺記に扶釈して「正は謂く中正、了は謂く照了、縁は謂く助縁、縁因は了因を資く、了は正因を顯わす、正因は勝縁を起こす、亦た是れ正因は了因に發り、了因は縁因に導かれ、縁因は正因を嚴り、正因は勝縁を起こす」と。

すなわち三因仏性は、互いに関連しあつて、一仏性を存するのである。

御義口伝下（七六八頁）内証には汝等三因仏性の善因あり、事に顯す時は善果と成つて皆当作仏す可しと礼拝し給うなり云云。

右の御義口伝は不輕品の文である。不輕品について日寛上人は末法相応抄に詳しく解説されている。

末法相応抄（富要三卷一四五頁） 文の十に云く「読誦經典は則ち了因性・皆行菩薩道は即ち縁因性・不敢えんにんしやう ふかん輕慢而復深敬は即正因性」文。さようまんにぶしんきやう

すなわち御本尊に向かつて、經典を讀誦し成仏することができる、これ了因仏性である。

御本尊によって仏道修行することが縁因仏性である。人のおのに正因仏性があり、御本尊を知ることが了因であり、御本尊に題目をあげることが縁因であり、それによって成仏することができる、すなわち了因仏性となるのである。

始聞仏乘義（九八三頁） 凡そ心有る者は是れ正因の種なり随したがつて一句を聞くは是れ了因の種なり低頭ていずこ挙手は是れ縁因の種なり。えんいん

又証真云く「聞法を下種と爲す了因の種なるが故に、発心を結縁と爲す仏果の縁なるが故に」

仏にあつて破することができない、天魔外道にあつても壊やぶることのできない、本有実相の理を正因仏性と名づけるのである。本有の妙智みやうちよく実相にかなつて、真性に通達照了するを了因仏性と名づけ、功德善根が外よりきて内外相応じて、了因の智慧ちえをたすけて、正因仏性を開發せしむるを、縁因仏性というのである。

観心本尊抄（二三九頁） 金鉞論こんべいろんに云く「乃すなわち是れ一草・一木・一礫りやく・一塵・各一仏性・各一因果あり縁了を具足す」等云云。

次に三因仏性を一念三千、空仮中の三諦、法報応の三身との関連からみることとする。

日寛上人の観心本尊抄文段（富要四卷二三五頁）を拝するに、

此れ即ち性得の三因仏性なり。各一仏性とは正因仏性なり、此の正因仏性即ち是れ一念三千なり。故に各一

因果と云うなり、謂く因果とは即ち是れ十如是の因果の二法なり、実相必ず諸法、諸法必ず十如、十如必ず十界、十界必ず身土、故に因果の二法即ち是れ一念三千なり。故に三千即中の辺を以て正因仏性と名るなり、此の三千即中の正因仏性の体に於て、三千即空、三千即仮の用を具足するなり、三千即仮は即ち是れ縁因仏性、三千即空は是れ了因仏性なり、故に具足縁了と云うなり。弘五中十四に云く、三千即空性は了因なり、三千即仮性は縁因なり、三千即中性は正因なり云云。

文の性得の三因仏性の性得とは、その性それ自体に有するところのものをいうのである。しかして、正因仏性とは、三千即中の辺をもって名づけるのであって、空仮中の三諦の中諦にあたり、あらゆるものの性のなかに、改められざる仏の性として自在している。また、正因仏性の体において、三千即空は了因仏性であり、三千即仮が縁因仏性の働きを具足するのである。

すなわち、正因仏性は体にして、縁因・了因仏性は用である。ゆえに体用を得るのである。御本尊の功德によつて仏身を感じるとき、法身如来と現われる。了因仏性とは、智と理とを相応して覚智すること、すなわち仏性を了すること、空諦であり、報身如来と現われる。縁因仏性とは、功德善根が外よりきたる、すなわち大御本尊を信じ、題目を唱え、折伏することによつて、内外相応じて、了因の智慧を助けて、正因仏性を開発する仏性であつて、仮諦であり、応身如来と現われる。

妙法尼御前御返事（一四〇三頁）我等衆生惡業・煩惱・生死果縛の身が、正・了・縁の三仏性の因によりて即法・報・応の三身と顕われん事疑ひなかるべし、妙法経力即身成仏と伝教大師も釈せられて候。

正了縁の三因仏性が、即法報応の三身と現われることは、この御文によつて明らかになるものである。

観心本尊抄（二三九頁） 金鉋論に云く「乃ち是れ一草・一木・一礫・一塵・各一仏性・各一因果あり縁了を具足す」等云云。

この御文は、人間の生命はもちろんのこと、草にも、木にも、塵にも、実在する物にはことごとく仏性があるのであって、その仏性を正了縁の三因仏性といい、御本尊の功德によって、仏身を成ずるときには、法報応の三身如来と現われるのである。

【四 悉 檀】

仏法を弘通するにあたって授受・折伏と共に必要なことは四悉檀である。四悉檀とは仏法を弘めるにあたっての方軌を示したもので、第一義悉檀・対治悉檀・世界悉檀・為人悉檀の四つであり、悉檀とは梵語で「偏く施す」「皆施」等の意である。

第一義悉檀とは真実義悉檀ともいって、法門を第一に立て「本門寿量品の肝心、文底秘沈の大法であるこの御本尊こそ、最高最第一である」等と説くことである。対治悉檀とは、断患悉檀ともいい、強く相手の邪義を打ち破ることである。世界（世間）悉檀とは、世間一般の事象（自然現象・社会問題）等によせて仏法をわからせていく説き方である。為人悉檀とは、個人個人の身によせて、仏法の道理を説くことで、貧乏で悩む者には、その原因と打開の法を、病気の者には、それにむいた説き方で教える等である。

このうち第一義と対治とは折伏型であり、世界と為人とは授受型であるが、また正像年間には授受を表にし

ながら四悉檀を立て、末法には折伏を表に立ててしかも四悉檀を心にかけて弘法すべきである。

顯立正意抄（五三七頁） 四悉檀を以て時に適うのみ。

太田左衛門尉御返事（一〇一五頁） 予が法門は四悉檀を心に懸けて申すならば強ちに成仏の理に違わざれば且らく世間普通の義を用ゆべきか。

【三 方便】

天台が、法華文句に、方便品の題を釈したとき、法華經の方便の意と、他經（爾前經）のいわゆる方便の意とを區別するために説かれたもの。三方便とは一に法用方便、二に能通方便、三に秘妙方便の三種である。

一に法用方便とは、衆生の機根に応じ、衆生の好むところに随つて説法をし、眞実の門に誘引しようという教えの説き方である。

二に能通方便とは、衆生が低い經によつて、悟つたと思つてゐることを、だめだと彈呵して眞実の門に入らしめる方便である。

以上二つの方便は方便品第二の長行に「正直に方便を捨てて但無上道を説く」と説かれる方便教で、釈迦が四十二年間にわたつて小乗・權大乘教で説いたものである。したがつて、この場合は、法華經を説くための手段、すなわち眞実でない權の教えであるという意味に使われているのであるから用いてはならないのである。

三に秘妙方便とは、秘妙門とも訳すべき法門で、実教である。秘とは仏と仏のみが知つてゐること、妙とは

衆生の思議しがたい境涯であり、具体的にいうならば、長者ちやうじや窮子の譬えや、衣裏珠えりじゆの譬えによつてわかるように、末法の衆生は種々の悩みや、凡夫そのままの愚かな境涯きやうがいに住んでゐるけれども、その身そのままが、久遠元初以来、御本仏日蓮大聖人の眷属けんぞくであり、仏なのだと悟る、これが秘妙方便である。悩んでゐるときのわれわれも、仏であると自覺して折伏行に励むときも、その体は一つでその人に変わりはない。これは仏のみ知れる不思議であるから秘妙方便という。

御義口伝上（七一四頁）所詮しよせん謗法不信の人は体外たいげの権にして法用能通ほうゆうのうつうの二種の方便なり爰こゝを以て無二無別に非るなり、今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱え奉るは是秘妙方便にして体内なり故に妙法蓮華經と題して次に方便品と云えり……一切衆生実相の仏なれば妙なり不思議なり謗法の人今之を知らざる故に之を秘と云う、又云く法界三千を秘妙とは云うなり秘とはきびしきなり三千羅列られつなり是より外に不思議之無し云云。

【相待妙・絶待妙】

彼と此と相對して取捨しゆしやを定め、文底下種の大御本尊のみが唯一無二ゆゐいつむにの即身成仏の直道じきじやうであると決定するのが相待妙である。絶待妙ぜつたいみやうとは大御本尊を信じて修行するにあたっては、法華經はもとより一切經・あらゆる論釈を取り入れて用ゐる立ち場である。

一代聖教大意（四〇三頁）相待妙の意は前の四時の一代聖教に法華經を對して爾前にぜんと之を嫌い、爾前をば当分と言ひ法華を跨節かせつと申す、絶待妙の意は一代聖教は即ち法華經なりと開會かいえす。

以上の御文で、当分とは、ある一部分の範囲内で論じ、跨節とは、より全体觀のうゑに論ずることである。また開會かいえすれば、あらゆる経々がすべて一味平等となるかといえ、そうではない。開會のうゑにも勝劣がある。十章抄じゅうしょうしやう（一二七五頁）設たとい開會をさとれる念仏なりとも猶なほ体内の権ごんなり体内の実に及ばず。

【体内・体外】

華嚴經・阿含經等は、体外の権經であり邪教・未得道教である。しかし法華經が説かれて、法華經の体内に開會し入れられて後は体内の権となるのである。また法華經においても、迹門は本門が説かれて会入の後でなければ体外の迹門であつて体内の迹門とならない。

当流行事抄（富要三卷一八二頁）に「通じて迹門に於いて自おのずから両意有り、一には顯本已前の迹門・是を体外の迹門と名づく即ち是れ本無ほんむ今有こんぬの法なり譬えば不識ふし天月但觀てんげつたんかんちげつ池月の如し、二には顯本已後の迹門・是を体内の迹門と名づく即ち本有常住ほんぬじようじゆうの法と成るなり例せば從じゆう本垂迹ほんすいじやく如月現水の釈じやくの如し」とある。

さらに本門寿量品といへども、文底が顯われなければ体内とはならない。当流行事抄（富要三卷一八九頁）に「是れ則ち顯と未顯と知と不知と天地遙かに異なり、謂く文底未だ顯われざるを名づけて体外と為す猶・不識天月但觀池月の如し、文底已に顯わるれば即ち体内と名づく・池月は即ち是れ天月の影と識るが如し、且しほらく我実成仏の文の如き若し本地第一・本果自行の成道を我実成仏と説くと言わば即ち是れ体外の寿量品なり、若し迹中最初の本果化他の成道を我実成仏と説くと言わば即ち是れ体内の寿量品なり」とある。

末法今時においては、直達正觀じきだつしやうかんの南無妙法蓮華經を知らない一切法は、体外である。上野殿御返事（一五四六頁）に「今末法に入りぬれば余經も法華經もせん註なし、但南無妙法蓮華經なるべし」とある。しかし絶待妙の立ち場からみると、三大秘法の御本尊を信ずるものには、体外の權經・実經は、体内の權經・実經となる。すなわち、妙法を知った上での一切法は体内となるのである。御義口伝上（七一四頁）に「妙法蓮華經の体内に爾前にぜんの人法を入るを妙法蓮華經方便品とは云うなり」とある。

体内の權 權經を相待妙そうたいみょうから見ると、体外の權經となるが、実經が説かれてのち絶待妙から見ると体内の權教となる。諸宗問答抄（三七七頁）に「絶待妙ぜつたいみょうと申すは開會かいえの法門にて候なり、此の時は爾前にぜん權教とて嫌ひ捨すてらるる所の教を皆法華の大海におさめ入るるなり、随したがつて法華の大海に入りぬれば爾前の權教とて嫌わるる者無きなり」とある。しかし同じ体内であっても權經は実經に劣る。十章抄（一二七五頁）に「設たとい開會をさされる念仏なりとも猶なほ体内の權なり体内の実に及ばず」とある。

体内の実 釈迦の最高の説法である実教（法華經二十八品）は体内であるが、三大秘法の御本尊が建立された末法においては、それ自体を独立して考えると体外となる。しかしながら、三大秘法の御本尊を信ずるものにとっては、体内の実となる。それゆえ、方便品・寿量品を助行として読誦するのである。当流行事抄参照。

【外用と内証げ ゆう ないしやう】

外用は内証に対する語。仏、菩薩が衆生教化のために、内証をかくして外部に見せた相貌そうみやうを外用という。内

証は内心のさとり、自己の心証によって仏法の哲理を体得すること。立正観抄（五三一頁）に「問う天台大師真実に此の一言の妙法を証得したまわざるや、答う内証爾らざるなり、外用に於ては之を弘通したまわざるなり、所謂内証の辺をば秘して外用には三觀と号して一念三千の法門を示現し給うなり」とある。

すべてのものに内証と外用がある。日蓮大聖人は、外用の辺にのぞめば上行の再誕日蓮であり、内証は久遠元初の自受用報身の再誕日蓮である。ゆえに文底秘沈抄（富要三卷七七頁）に「問う久遠元初の自受用身とは即ち是れ本因妙の教主釈尊なり、而して諸門流一同の義に曰く『蓮祖は即ち是れ本化上行の再誕』と云云、其の義文理分明なり、処々に之を示すが如し、今何ぞ蓮祖を久遠元初の自受用身と称し奉るや。答う外用淺近は実に所問の如し、今は内証深秘の故に自受用報身の再誕と云うなり。血脈抄に云く久遠名字已來本因本果の主・本地自受用報身の垂迹・上行菩薩・再誕・本門の大師日蓮等云云。若し外用の淺近に望めば上行の再誕日蓮なり、若し内証の深秘に望まば本地自受用の再誕日蓮なり、故に知ぬ本地は自受用身・垂迹は上行菩薩・顯本は日蓮なり」と。

また、天台、伝教にも、内証外用があることが示されている。等海抄三、伝法護国論、山門縁起を引いた後、文底秘沈抄（富要三卷七九頁）に「若し外用淺近は天台即ち是れ藥王の再誕なり伝教亦是れ天台の後身なり、然りと雖も台家内証の深秘は俱に釈尊と是れ一体なり、他流の輩は内証深秘の相伝を知らざる故に外用の一边を執するのみ」と。また「蓮祖の本地内証外用の事」（富要三卷三〇四頁）に「凡そ蓮祖大聖人は若し外用を論ぜば本化上行菩薩の再誕、諸抄の中に或は仏の御使と云ひ、或は靈山相伝等と云ふが如きは是れなり、若し内証を論ずれば、久遠元初の本因妙の教主釈尊なり、諸文の中に、日蓮は日本国は一切衆生の主師親等と

云うが如きはなり」本因妙口決に「是れ又内証外用の二途を以て意得べし」と。このように外用・内証は明らかであり、正しい相伝がないゆえに、外用の姿にこだわって大聖人を菩薩と下すような邪義を立てれば、それは墮地獄の徒という以外ない。

【依義判文】

依義判文とは「義に依って文を判ずる」のであり、依文判義とは「文に依って義を判ずる」のである。法華經の文によって立てる教義というものは、末法に必要な熟脱じゅくだつの法であるが、文底下種の大御本尊の義によって法華經の文を判ずれば、法華經の文にも三大秘法が明らかに説かれているようなものである。

十章抄（一二七四頁） 一念三千の出处は略開三の十如实相なれども義分は本門に限る・爾前は迹門の依義判文・迹門は本門の依義判文なり、但真實の依文判義は本門に限るべし。

以上の御文によって、本門を文底独一本門と拝するならば、法華經の本迹二門とも文底独一本門の依義判文であり、ただ眞の依文判義は日蓮大聖人がご建立の独一本門に限るべしとなるのである。

なお依義判文については日寛上人の依義判文抄を参照すべきである。

撰時抄（二七二頁）に「最大の深密じんみつの正法經文の面に現前げんぜんなり」と仰せられる意味は、法華經本迹二門を文底独一本門の義によって判ずるゆえに顕然けんねんとなるのである。すなわち三大秘法の依文が寿量品の「是好良藥今留在此るざいし」のように明らかに示されているのである。

また日蓮大聖人の御書を拝読するにあたっては、依義判文は大切である。釈尊の仏像造立を賛嘆せられたからといって、釈尊を本尊とすべきでない。念仏を破折するために法華經を立てられたからといって、法華經さえやればそれでいいというわけではない。他宗派との論争は、特にこの点を明らかにして臨まなければならぬ。

【前三・後三】

法華經涌出品において、迹化他方の菩薩達が、滅後末法に、娑婆世界に住して、法華經を弘通したいと誓ったのに対し、釈尊は「止みね善男子」と、これをとどめ、下方より本化地涌の菩薩を召して、寿量品の肝心たる妙法蓮華經の五字をもつて一閻浮提の一切衆生に授与せしめた。

さて迹化他方の菩薩に仏滅後の弘教を中止してなぜ本化を召し出したかというに、これについて天台は前三後三の釈を説いて明らかにしている。いまその前三後三の六種の釈を述べるならば次の御書に明らかである。

上行菩薩結要付属口伝（五四〇頁）

文句の九に云く涌出品下「如来之を止めたもうに凡そ三義有り、

- 前三
- 一、汝等各各なんだちに自ら己おのが任有り若し此の土に住せば彼の利益を廢せん。
 - 二、他方は此土結縁しどけちえんの事浅し宣授せんじゆせんと欲すと雖も必ず巨益こやく無からん。
 - 三、若し之を許さば則ち下すなわを召すことを得ず下若し来らずんば迹しやくを破することを得ず遠おんを顯あらわすことを得ず。

是の三義をもつて如来之を止めたもうと為す、下方を召して来らしむるに亦三義有り、

後三

- 一、是れ我が弟子なり我が法を弘むべし。
- 二、縁深広なるを以て能く此の土に遍じて益し分身の土に遍して益し他方の土に遍して益す。
- 三、開近顯遠することを得。

是の故に彼を止めて下を召すなり」と云云。

また日寛上人（三重秘伝抄第一、本尊抄講義録参照）は第一に他方・本化の前三後三として、

前三

- 一、他方は釈尊の直弟に非る故に、義疏第十に云く「他方は釈迦の所化に非ず」と、
- 二、他方は各任国有り、故に天台云く「他方は各各自らの任国有り」と、
- 三、他方は此土結縁の事浅し、故に、天台云く「他方は此土結縁の事浅し」と、

後三

- 一、本化は釈尊の直弟の故に、天台云く「是れ我が弟子我が法を弘むべし」と、
- 二、本化は常に此土に住する故に、曾谷入道等許御書（一〇三二頁）に云く「娑婆世界に住すること多塵劫なり」と、
- 三、本化は結縁の事深きが故に、天台云く「縁深厚を以て能く此土に遍じて益す」と、

次に迹化・本化の前三後三とは、

前三

- 一、迹化は釈尊名字即の弟子に非る故に、本尊抄（二五〇頁）に云く「迹化の大衆は釈尊初発心の弟子等に非ず」と、
- 二、迹化は本法所持の人に非ざる故に、本尊抄（二五一頁）に云く「又爾前迹門の菩薩なり本法所持の人に非ず」と、

三、迹化は功を積むこと浅き故に、新尼抄（九〇五頁）に云く「観音藥王等は智慧美じく覚えある人々と雖も、法華經を学す日浅く末代の大難忍び難かるべし」等云云。

一、本化は釈尊名字即の弟子なるが故に、本尊抄（二五三頁）に云く「地涌千界は教主釈尊の初発心の弟子なり」と、

二、本化は本法所持の人なる故に、輔正記に云く「法是れ久成の法なるを以ての故に久成の人に付す」と御義口伝上（七五一頁）に云く「此の菩薩は本法所持の人なり」と、

三、本化は功を積むこと深き故に、下山御消息に云く「五百塵点劫以来一向に本門寿量の肝心を修業し習い給う上行菩薩等」云云。

このように迹化・他方と地涌の大菩薩の根本的な相違を知るならば、仏が迹化の菩薩等を制止して本化の菩薩を召し出した意味がわかるであらう。

【立正安国論】

文応元年七月、時の執権・北条時頼にあてた国諫の書である。他の御書と異なり、主客問答十段によって構成されている。御勘由来等に明らかなように、当時鎌倉においては、法然の念仏宗をはじめ、禪宗、真言宗等がはびこり、政治的にも動乱たえまなく、地震、大風、疫病等の天変地天により、民衆は塗炭の苦しみにあえいでいた。

日蓮大聖人は民衆救済のために、その根本原因を「世皆正に背き人悉く悪に帰す」ゆえであると、念仏を正

意に大折伏を現じ、仏法の肝要たる妙法蓮華經に帰せよと叫ばれている。

特に為政者の自覚をうながし、治国の者が宗教の正邪に迷い、正法を失うならば、必ず国の滅びる大難がある、大集經、仁王經、金光明經、藥師經等に照らされて、予言されている。

しかして大聖人の予言どおり、自界叛逆難、他国侵逼難が実現したのである。後段にいたり「汝早く信仰の寸心を改めて速に実乗の一善に帰せよ、然れば則ち三界は皆仏国なり仏国其れ衰んや」と正法に帰依することによってのみ、真の平和な国土を建設することができると仰せである。現在われわれの広宣流布への戦いも、この安国論の精神によるのであって、安国論こそ、末法一切衆生への強烈な指導書であり、一大予言書であると共に、国家安穩・天下泰平の一国治術の一大法則なのである。（詳しくは立正安国論講義を参照されたい）

【開目抄】

文永九年二月に、佐渡においてご述作である。日蓮大聖人の御遺文中、最も重大な、十大部の一つで、上下二巻からなっている。法本尊開頭の観心本尊抄に対して、人本尊の開頭の書であり、日蓮大聖人の仏法における、教行証のうち、教にあたる最も重要な御書である。

日蓮大聖人は次のようにこの御書の重要かつ、特異性をお述べになっている。

種種御振舞御書（九一九） 去年の十一月より勘えたる開目抄と申す文二巻造りたり、頸切るるならば日蓮が不思議とどめんと思ひて勘えたり、此の文の心は日蓮によりて日本国の有無はあるべし。

開目抄下（二二三頁） 此れは釈迦・多宝・十方の諸仏の未來日本國・當世をうつし給う明鏡なりかたみともみるべし。

本文は、初めに「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり所謂主師親いわゆるしゆしこれなり」（開目抄上一八六頁）と、一般に、尊敬すべき主目を打ち出され、中國の儒教、インドのバラモン、さらに仏教にはいつて、種々の主師親とその依経等、これらを五重相對によつて判釈はんしゃくされ、文底下種本門の教主釈尊こそ、末法における眞實の主師親であることを述べられている。しこうして「此れをしれる者は但日蓮一人なり」（開目抄上二〇〇頁）、「日蓮は日本國の諸人にしうし父母なり」（開目抄下二三七頁）と結論されて、ご自身こそ、末法の御本仏であることを明かされている。（詳しくは日寛上人の開目抄文段、開目抄講義上下卷を参照されたい）

【観心本尊抄】 かんじんのほんぞんしょう

日蓮大聖人が佐渡ご流罪中、文永十年四月、御年五十二歳のご述作である。富木日常を主として、弟子中に賜たまわった御書である。十大部中、立正安國論、開目抄と共に極理ごくり中の極理、仏法哲理の眞髓しんずいを説き明かされた重要な御書の一つである。本抄を説かれるにさきだつて、前年、開目抄をおしたためになり、末法の御本仏たることを開頭されているが、さらに本抄においては、五重三段により法本尊の開頭がなされ、末法の衆生は、この御本尊を信すべきことを、理論と實際とをもつて説き明かされている。

題号は「如来滅後五五百歳に始む観心の本尊抄」と時・応・機・法の四義に照らして拝読すべきで、その意

は「如来滅後五五百歳に、上行菩薩始めて弘む、觀心の本尊抄」となり、本文に「但し彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり」（二四九頁）と仰せられているように、釈尊の教相脱益の本尊を破し、文底深秘の事の一念三千の当体たる御本尊をお示しである。ゆえに日蓮大聖人は「此の事日蓮身に当るの大事なり」（二五五頁）と仰せられている。

また觀心とはわれら衆生の觀心であり、但本門の御本尊を受持し、信心無二に南無妙法蓮華經と唱えることで「我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り与え給う」（二四六頁）と仰せられ、受持即觀心の義を明かされている。当抄が、受持即觀心を説かれ、われわれの信心修行を明かされているので、教・行・証のなかの行にあたるのである。（詳しくは日寛上人の觀心本尊抄文段、十大部講義第四卷を研究されたい）

【十 大部】

日蓮大聖人御遺文中、特に重要な御書十編をいう。

唱法華題目抄（一―一六頁）

文応元年五月、鎌倉においてご述作である。問答形式により、教を上げ機を下して、法華經を否定する念仏者の所論を破し、大小権実教判をもって、広く諸宗の無得道なことを折伏され、「妙法蓮華經の五字を唱うる功德莫大なり諸仏・諸經の題目は法華經の所開なり妙法は能開なりとしりて法華經の題目を唱うべし」と述べられて、妙法の題目こそ、成仏の大法であると説かれている。

立正安国論（一七〇三五頁）

文応元年七月、鎌倉においてご述作である。時の執権・北条時頼にあてて、三災七難のよってきたる原因は、一国をあげて念仏をはじめとする邪宗・邪義の尊崇により、神天上して、守護なきゆえである、災いを止め平和国土の建設は、妙法五字の正法によらねばならぬ、為政者たるもの、宗教の邪正を心にかけてねばならぬ、と厳しく戒められた諫曉の書である。日蓮大聖人が三度の高名と仰せられるなかの第一にあたる。

開目抄（一八六〇二三七頁）

文永九年二月、佐渡・塚原においてご述作である。日蓮大聖人の仏法のうち、教にあたる重要な御抄で、日蓮大聖人出世のご本懐たる三大秘法の御本尊建立にさきだち、本書において、人本尊を開顕あそばされ、日蓮こそ末法における主師親の三徳具備の御本仏であるとのご宣言の書である。

観心本尊抄（二三八〇二五五頁）

文永十年四月、佐渡においてご述作である。日蓮大聖人の仏法における行にあたる、重要な御抄である。初めに末法の観心とは、受持即観心なることを明かし、次に五重三段によって、一切教を判釈されて、文底深秘の大法・本地難思・境智冥合・本有無作・事の一念三千の妙法五字をもって、末法幼稚の本尊となされている。すなわち妙法五字こそ、末法流通の正体であると、法本尊開顕の書である。

撰時抄（二五六〇二九二頁）

建治元年、身延においてご述作である。

「夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし」と、仏法流布に時の大事なことをまず述べられ、広く正像

末に流布の法体を明かし、竜樹、天台、伝教等が内鑑冷然して、妙法を説かなかったことを明かし、次に諸宗の教主を破折して、日蓮大聖人こそ末法下種の教主、一閻浮提第一の法華經の行者、即御本仏であると、文証をあげて確信されている。

報恩抄（二九三―三三〇頁）

建治二年七月、身延においてご述作である。旧師道善房死去を聞いて、追善謝徳のために、したためられ、清澄の浄願房、義浄房の兩人へ送られている。当抄の送文（三三〇頁）に「此の文は随分大事の大事どもをかきて候ぞ」と仰せられているように、広く諸宗を、別して真言宗の謗法なることを、慈覚、智証等をあげて破折せられ、日蓮大聖人の大折伏は、一切衆生報恩のためであり、正しく本門の三大秘法は必ず広宣流布するのであると結ばれている。

法華取要抄（三三一―三三八頁）

文永十一年五月、身延においてご述作である。初めに一代諸經の勝劣を明かし、広略要の法華經の中でも、広略を簡んで、要中の要すなわち三大秘法の御本尊こそ、末法弘通の本体であると述べられている。

四信五品抄（三三八―三四三頁）

建治三年四月、身延山においてご述作である。法華經分別功德品の四信と五品とについて、末法の法華經の行者の位を示され、その位が爾前迹門の円人に百千万倍すぐれることを明かされて、一念信解、初随喜こそ、名字即の凡夫位にあるわれら衆生の修行の肝要であり、ただ御本尊を信じて題目を唱えることが成仏の直道であると述べられている。

下山御消息（三四三―三六四頁）

建治三年六月、身延においてご述作である。ご門下の因幡房日永いなば ほうにちえいに代わっておしたためになり、下山領主の兵庫五郎光基ひょうごごろうみつもとに与えられた御抄である。光基に対して、念仏を捨てて、法華經に帰きすることが、最も正義であり至忠至孝であることを述べられている。まず日永が念仏を捨て正法を信じた経過けいこを述べ、四箇かの格言かくげんをもつて、念仏、禅、真言、律の邪義を破折され、三度の国諫こっかんがいられず、そのことによって身延へ入山されたいきさつが明かされている。特に念仏墮地獄だじごくを強調された御抄である。

本尊問答抄（三六五―三七四頁）

弘安元年九月、身延においてご述作、浄願房日仲じようけんぼう じちゅうに与えられた御抄である。

問答形式により、本尊の義を明かし、通じては諸宗の本尊、別しては真言宗の本尊を厳きびしく破折されている。すなわち三大師等の謗法ぼうぼうをあげ、承久じやうきゆうの乱の現証をもつて、真言亡国の旨むねを断定だんていされ、最後に日蓮大聖人の妙法五字の御本尊の未曾有みそうなるを説き、法華經の題目（三大秘法）こそ末法弘通の御本尊であると述べられている。

【大綱と綱目】 たいこう もうもく

法華經と爾前經にぜんを相對して、法華は大綱たいこうであり、爾前は綱目もうもくであるとする。そのゆえは法華經のみ成仏得道とくどうの教えであつて、爾前經には得道するという文はあつてもその実義がない。しかし爾前經といえども、成仏の

文以外は、法華經のためにこれを用いる。あたかも大綱を引けば、すべての綱目がそれぞれの立ち場で働きをなすようなものである。これは絶待妙ぜつたいみょうの立ち場から論ずる場合である。

日蓮大聖人が立正安国論や、そのほかの御書に、爾前の經文を引いて文証とされたのは、以上の理由によるのである。また三大秘法の建立されて以後には、法華經本迹二門はもちろんのこと、あらゆる經教がすべて大綱たる大御本尊の綱目となるのである。

觀心本尊得意抄(九七二頁) 総じて一代聖教を大に分つて二と爲す一には大綱たいこう二には綱目もうもくなり、初の大綱とは成仏得道の教なり、成仏の教とは法華經なり、次に綱目とは法華已前の諸經なり、彼の諸經等は不成仏の教なり……法華の爲の綱目なるが故に法華の証文に之を引き用ゆ可きなり。

また末法においては三大秘法が大綱となり、法華經をはじめ一切の經教がごとごとく綱目となる。

御義口伝下(七六六頁) 天台の「綱維こういを提ひぐるに目として動かざること無きが如し」等と釈する此の意なり、妙樂大師は「略して經題を挙あぐるに玄に一部を収おさむ」と、此等を心得ざる者は末法の弘通に足らざる者なり。

右の御義口伝は、常不輕品に流通を釈せられた続きの御文である。すなわち三大秘法の南無妙法蓮華經に一切を収めて、法華經本迹二門もまったく三大秘法の綱目として依用されるとの意である。